田沢義鋪の人間形成論

―― 青年団教育に追求した国民主義の課題 ――

長　　清　子

1．まえがき
2．田沢義鋪という人
3．田沢義鋪の人間形成論
　a．青年団運動の本質の把え方
　b．青年修養論　――「修養」の概念をめぐって――
　c．「道の国日本」の形成を担う国民像
　d．篤農青年の育成と移植民教育策
4．あとがき　――田沢の挫折から学ぶこと――

ま え が き

田沢義鋪（明治18年――昭和19年，1885―1944）は，『次郎物語』の下村湖人と共に，近代日本における青年団運動を育成，推進した独得の教育思想家であり，また，実践家（教育者）であった。私が田沢義鋪の人間形成論――その理念と実践に特に興味を覚えるのは，明治末年より大正時代にかけて農村の青年団の育成者として当時の国民教育に与えた影響が非常に大きかったというだけでなく，その人間形成論が明治以来の絶対主義的天皇制国家のデザインによる国家主義的教育とは質を異にする「国民主義」的課題を追求するものだったことによる。それは富国強兵の国家像の形成を担う天皇の臣民としての国民像に代って，道義の国としての日本の形成を課題とし，そのために自治的な農村を下からつくり上げてゆくような人間像としての国民像を追求するものである。近代日本において見出すナショナ

リズムのうち，国民の側の内発性に重点をおく国民主義的課題を負う立場の一つの典型がここには見られるように思うのである。それが，いわゆる「国民主義」として成功しているかどうか？　日本的ナショナリズムの系譜の中に一つのユニークな特質をもつ国民主義が田沢義鋪の教育思想の中に掘り起せるかどうか試みてみたいと思うのである。

第二に，近代日本における人間尊重思想（ヒューマニズムといってもいいかもしれない）の系譜をたどるとき，西洋から導入されたキリスト教思想，あるいは，その他のヒューマニズムとは区別して，東洋的宗教思想や道徳思想に根をもつ人間尊重思想が西洋のヒューマニズム（あるいは社会主義思想）に触発され，あるいは，それと結合し綜合されたような姿で一種のヒューマニズムとも云うべき人間尊重思想が明治末期頃よりいろいろの萠芽を見せはじめた。そして，それが大正デモクラシー，あるいは，大正ヒューマニズムの苗床ともなったように思えるのであるが，田沢義鋪の思想が，こうした日本の精神的伝統より内発的に発生・成長した，道義的ヒューマニズムともよぶべきものとして，この系譜に属しうるものであるかどうかが明らかにしたいもう一つの課題なのである。

第三に，近代日本には国家主義的教育を推進するための教育行政の方策やそれを教育的に実行するための手引きとしての教科書や教育論，教育技術論はあるが，人間形成論――青少年期のcharacter building を人間の内面からじっくりと取り扱うような意味での人間形成論は決して多くないように思う。その点，青年団運動を通しての田沢の教育実践活動は，下村湖人の『次郎物語』が日本における人間形成を課題とする開拓的な青少年文学であると共通の特質を担うものと云えるのではないかと私は思う。それは，青年団教育を近代日本教育史の中で位置づけて取扱うのみにとどまらず，日本の精神的伝統を背景とし，農村共同体をその実現の土壌として追求される勤労青少年（当時の一般青少年と云ってもいい）の一つの人間形成論として，近代日本教育思想史の中に位置づけて把握しようとする試みでもあるのである。

以上のような問題意識をもって田沢義鋪の人間形成論を主として青年団運動の形成期，発展期を中心として(後の協調会時代をも多少含めるが)，その講習会などを中心とする教育活動，彼の書き残した文献（著書，および，雑誌)，彼の育成した青年団運動などを主たる資料として，考察してみたいと思う。

田沢の思想に入る前に，先ず，田沢義鋪という人の概容を見ておくこととしよう。

2　田沢義鋪という人

田沢義鋪は明治18年（1885）7月20日，佐賀県藤津郡鹿島村大字高津原434に父義陳，母みすの長男として生れた。熊本第五高等学校を経て東京帝国大学の法科大学政治科に入学したのが明治38年（1905）のことであり（21歳)，明治42年（1909）まで在学した。従って，明治35年にドイツ留学より帰国して東京帝大法科大学教授に任命された美濃部達吉（彼は初期には比較法制史，行政法などの講座を担当し，後，憲法を兼担した）とも幾分接触を持ったであろうし，その思想的影響もある程度受けたであろうことが推測出来るのである。卒業前，かれは，休暇を利用して日露戦後のわが国の支配下に入った満鮮地方の視察の途に上った。この旅行が学生時代の彼に日本の国民性の現状と未来に関して深く考えさせる機会となると共に彼の将来にある決定的な方向を指し示すこととともなったと云えるのではないかと思う。日本に有数の「人間形成」をテーマとする少年少女文学と目される『次郎物語』の著者で田沢の親友であり，また，彼の伝記記者であった下村湖人はこの満鮮への田沢の旅行について次のように書いている。

「この旅行は，おそらく，かれの大学年間の生活中，最大の体験であったろうと思われる。とりわけかれが大連で見た光景は，かれの胸に一大衝撃を与え，終生消すことの出来ない義憤を感ぜしめた。それは，戦勝を笠に着た日本人の傲慢さであり，中国の苦力などに対するその非人道的取扱

いであった。

かれはその光景に接すると，眼を開いている勇気をさえほとんど失った。そして，ひたすらに恥じ，おそれ，悲しみ，憤った。かれがこれまで日本民族の一員として抱いていた自信は，この現実によって完全にくつがえされ，同時に，かれ自身の胸に久しく培われて来た道義感が，猛然として戦闘態勢をとりはじめたのである。『海外発展？　それが何だ。もし日本民族の情感と道感とが永久にこのままであるとするならば，それは発展どころか，恥辱の拡大であり，民族的怨恨の種をまきちらすに過ぎないのではないのか。それでは，地図の上でどんなに発展しようとも，遠からず国の基礎がゆらぐであろう。道義なくして何の国家だ。日本は東洋のならず者になってはならない。そのために今何よりも大事なことは，国民性を人類的，世界的立場に立って矯め直すことだ。大国民的性格の教養！そうだ。これこそ国民生活の全部門をあげての基調をなすものでなければならない。とりわけ，政治と教育とにおいて然りだ』。これが田沢の満鮮旅行の結論であり，同時にかれ自身の将来を指向する決意でもあった。そして，この決意に基づいて，かれは卒業後，行政官としてのスタートを切ることになったのである。[1]」（傍点――引用者）

明治42年7月に東大法科の政治学科を卒業した田沢は，高等文官行政科を受験して合格した。そして，明治43年4月末，静岡県属に任ぜられ，役人（内務官僚）としての生活を始めたのであった。4カ月ばかり地方官の見習をした田沢は同年8月，かぞえ年26才で静岡県安倍郡長に任ぜられた。当時，東京帝大出身の内務官僚で府県庁に勤務した青年官吏のうち，半数くらいは知事の配慮で地方自治体の実情に通じるため郡長などに任命されたようであるが，田沢が26才の若さで，郡長になったことは同地方では異例のことで珍しがられたようである。この郡長時代に，あとで詳述するように彼は，農村青年の教育に意を注ぎ，自治村の形成をも課題としながら農村を基盤とする青年団を育成したのである。彼は，また，その活動範囲をひろげ，農村青年の人間形成を目的とする天幕講習会を全国各地でひら

き，全国的青年団運動の下地をつくった。こうした動きは，更に，明治神宮造営のための全国青年団による作業奉仕（天幕講習会を伴う）を契機として，後日，大日本連合青年団の結成，全国の青年の一人一円献金による日本青年館建設などに発展してゆくこととなった。このようにして明治末年より大正時代を貫き，更に，昭和期にかけて日本の青年教育の重要な役割を果した青年団運動の中心に田沢義鋪を見出すのである。

第二に，田沢義鋪は大正9年，財団法人協調会の常務理事に就任した。大正6年（1917）のロシア革命の成功は労働階級や社会主義者たちに社会変革への希望をいだかせる上に大きな力となった。物価騰貴による庶民の生活苦や生活不安は，世界大戦後の成金階層への反感などとも相俟って，大正7年8月の米騒動となって爆発し，労働争議も頻発し，第1回メーデー，水平社創立と部落解放運動の自発的もり上り，日本共産党の誕生などにも見られるように，労資の対立と相剋はきびしさを増して来た。そうした情勢を緩和することを目的として大正8年（1919）12月，協調会が設立され，会長に時の貴族院議長徳川家達，副会長に実業界の渋沢栄一が就任した。当初の計画では資本家側，労働者側，政府側，学者側から夫々代表を出して管理機関を構成するもくろみであったが，かんじんの労働者側では議論百出でついに参加しなかった。こうした協調会の行き悩みを打開するために渋沢，内務大臣床次竹二郎らが協議の末，管理機関の主脳者である常務理事三名を更迭するとし，その一人として青年団の育成者として青年層の信望を集めた田沢義鋪を迎え入れることとなったのである。田沢の協調会入りが日本の民主化にプラスになったか否かには多くの問題が含まれているが，主観的には彼は「日本」の運命にとっての難関をきりぬけるために奉仕しようという善意をもって協調会常任理事に新任したのである。

そして，彼は，農村青年を対象としてなしたと同様，労務者講習会をなし，個人的には非常に大きな人格的影響を与え，無頼の徒として人々から恐れられ，嫌悪された酒飲みの労働者が田沢の講習会に出て以来，生れ変ったように真面目に働く模範労働者になったというようなこともあったよう

である。また，大正11年（1922）には，第4回国際労働会議に労働代表として出席した。もっとも，当時，日本の労働組合では日本政府が代表の詮衡をする国際労働会議に対しては，否認運動をなしていたのであり，この第4回の場合も日本労働総同盟，労働組合同盟会など多数の組合は，詮衡委員の選挙に棄権し，投票に参加したのはごく少数であった。8月8日外務省での開票の結果は，川合信水—129票，賀川豊彦—106票，田沢義鋪—95票，鈴木文治—45票であり，はじめの二人の辞退によって田沢が選出されたわけであるから，当時の日本の労働組合の代表というよりも官選の代表の観濃厚であることはいなめない。大宮の鉄道工場の養成工の出身で，大正5年ごろから東京に出て友愛会（総同盟の前身）に入り，各地の労働争議の指導者であり，亀戸事件の立役者でもあった平沢計七は，後，無政府主義者大杉 栄に私淑した労働者であるが，この平沢は田沢の出発の迫ったある日，協調会の常務理事室に数名の労働者と共に面会を求めて来て「貴公に労働代表の資格があるか，労働代表は労働者でなければならない」とせめより，代表辞退を要求したというような一幕のあったことも，当時の日本の労働者の反応の一面を物語るものであろう。ちなみに，この平沢はその年の関東大震災のどさくさに亀戸署に捕われ，9名の労働組合員や共産主義者と共に戒厳令下の軍隊に刺殺されている。それは，平沢が私淑していた大杉 栄が甘粕憲兵大尉に扼殺されたのと相前後してのことであった。

以上のような事実の中に，田沢の協調会活動の主観的意図にもかかわらず，日本の労働者問題の客観的状勢が見られるように思えるのである。しかし，田沢にとって，この期間はとにもかくにも労働者教育に専念した時期であった。そして，上にも記したように，個々の労働者への彼の人格的影響は大きかったようである。そこに内在した彼の国民国家のイメージの問題に関しては青年団教育におけるこの問題と共に後に取上げたいと思う。

大正13年8月，田沢は，協調会常務理事を辞任したのであるが，この前後より田沢は政治に具体的に参与し，また，政治教育に積極的な働きかけをし

ている。同年5月，彼がかって郡長として青年団を育成した静岡県第三区より衆議院議員に立候補し，理想選挙を戦って落選。10月には東京市助役に就任したりしているが（1年9カ月在任)，こうした実践が彼に選挙粛正の問題や現在，および未来の有権者の政治教育の必要を痛感せしめたのであろう。同年1月には政治教育運動を起すことを目的として新政社を創立し，その機関誌『新政』（大正13年1月創刊)，『大成』（大正15年1月創刊，昭和3年1月には両雑誌を合併して『大成』一本とする）などを刊行し，あるいは，政治教育を目的として書かれた著書『政治教育講話』（大正15年)，『政治教育小論』（昭和7年）等も出版している。このように文章をもって訴える一方，昭和2年には選挙粛正同盟会を提唱創立し，選挙粛正運動を展開し，昭和5年3月には，選挙革正審議会に対して，「連座法の制定と政治教育団体の創立」を建設し，昭和7年には法制審議会の選挙法改正の委員として尽力するなど具体的実践活動もしている。貴族院議員に勅選されたのは昭和8年である。

以上，彼は政府との関係で労資の協調を目ざす協調会の常務理事として労働者教育にあたり，また，政治に直接関係をもちながら選挙粛正運動や政治教育を実践した。

しかしながら，彼の活動の本領は何と云っても，青年団運動にあった。協調会を辞任した田沢は，同じ年（大正13年）に結成された大日本青年団の理事に就任しており，翌大正14年10月にはかって田沢の指導によって明治神宮御造営の作業奉仕に参加した全国の青年たちによる1人1円献金によって日本青年会館が建設され，〔若槻内務大臣，岡田文部大臣をはじめ，内務省，文部省の積極策をうしろ楯として)，開館式には「道の国日本の完成」と題する記念講演を田沢が行っている。昭和4年には壮年団期成同盟会を創立し，壮年団運動を展開，昭和6年には都下武蔵小金井浴恩館に青年指導者養成所を開設し，全国の中堅青年たちを集めて長期講習の指導に自ら当り，昭和8年には田沢の親友，下村湖人を講習所長に迎えている。更に，昭和9年には大日本青年団理事長に就任しているのであって，彼は

まさしく大日本青年団の育成者であり，また，この運動の指導者であった。

更に，この時期に彼は,『道の国日本の完成』(昭和3年),『青年団の使命』(昭和3年),『私を感激せしめた人々』(昭和6年),『農村更正と青年教育』(昭和8年),『旅塵』,『青年修養論(人生篇)』(昭和11年)『青年如何に生くべきか』(昭和12年) 等,多数の著書を出版し，青年のために人間形成の方向をさし示そうとしている。彼の生涯をかけた青年運動の実践を貫いて追求されて来た教育思想がここには見出せるのであり，また，その「人間形成論」も，この時期に円熟した内容をもって来たとも云えよう。

2・26事件で岡田内閣が総辞職したあと，広田弘毅の内閣に内務大臣として入閣を求められたというようなこともあったが，それを断った田沢は，昭和14年には淀橋青果青年学校の校長に（無給で）自ら志願して就任している。そして,野菜や果物の配達や売子として働く140名の青年たちの教育に心を傾けたようである。そして，太平洋戦争も深まる昭和19年(1944),講演の旅にあって四国善通寺で倒れ，その地で世を去った。

3 田沢義鋪の人間形成論

以上，田沢義鋪という人を，その生涯を通じての活動によって概観したのであるが，はじめにもふれたような彼の「思想」に関する関心をもって，彼の追求した国民主義の課題，その人間形成論を次の諸点において考察したいと思う。

a. 青年団運動の本質の把え方

b. 青年修養論

c. 「道の国日本」の形成を担う国民像

d. 篤農青年の育成と移植民教育策

a. 青年団運動の本質の把え方

明治末期より大正時代にかけて，政府の指導のもとに青年団を育成・強化しようとする動きが活潑化する。大正元年11月には第1回青年団調査委員会が文部省に設置され，青年団は「補習教育機関」であると同時に「公

共事業団体」であると規定され，文部省の補習教育方策と内務省の地方行政方策との線上に青年団が重要な位置を占めて来ることとなった。当時，青年団に関して度々政府の訓令が出され，また，青年団を全国的に結合しようとする政策が積極化して来た。

大正4年，内務，文部両大臣は地方長官に対して青年団に関する次のような訓令を発し，政府が指導し，奨励する青年団の目標を明らかにした。

内務省
文部省　訓　　令

青年団の設置は，今や漸く全国に洽く，其の振否は，国運の伸暢，地方の開発に影響する所，特に大なるものあり。此際一層青年団体の指導に努め，以て完全なる発達を遂げしむるは，内外現時の情勢に照し，最も喫緊の一要務たるべきを信ず。抑々青年団体は青年修養の機関たり，其の本旨とする所は青年をして健全なる国民，善良なる公民たるの素養を得しむるに在り，随て団体員をして，忠孝の本義を体し，品性の向上を図り，体力を増進し，実際生活に適切なる知能を研き，剛健勤勉，克く国家の進運を扶持するの精神と素質とを養成せしむるは，刻下最も緊切の事に属す。其の之をして事業に当り，実務に従い，以て練習を積ましむるもの，又固より修養に資せしむる所以に外ならず，若し夫れ団体にして，其の嚮う所を誤り，施設其の宜しきを得ざることあらむか，啻に所期の成績を挙げ得ざるのみならず，其の弊の及ぶ所測り知るべからざるものあらむ。故に，地方当局者は，須く此に留意し，地方実際の情況に応じ，最も適実なる指導を与え，以て団体をして健全なる発達を遂げしめむことを期すべし。

大正四年九月十五日

内務大臣　一木喜徳郎
文部大臣　高田　早苗

更に，これと時を同じくして，内務，文部両次官の通牒を発して，青年団の組織経営等の根本方針を示して，運動の統一を試みようとした。(2)

こうした内務・文部両当局による青年団組織化への積極的な姿勢の背後には，第一に，明治末期より地方行政の方向として明らかとなって来た特色であるが，行政監督の強化，および，行政機能の能率化を通じての官僚的支配の強化と相表裏するところの，住民の内側から自発的な服従協力を

喚起しようとする「地方改良運動」が見られる。明治42年，当時の内務次官一木喜徳郎は「一国興衰の本源は懸って地方の風紀および行政の良否に因るものにして，地方自治は実に一国の基礎なれば国運の発展上ますますこれが改良発達を図らざるべからず[3]」と云っていることにも，内務省の方針が見られる。この地方改良運動は，内務省を中心として，自治矯風，奨善，教化，経済等の各方面における成績優良な団体や個人に対する表彰，模範例の蒐集，地方改良講習会などの形をとって具体的に進められた[4]。明治39年に創設された報徳会が内務省関係の人々を発起人として発足しており（機関誌『斯民』を発行[5]），報徳精神を普及し，地方自治の重要さを強調し，地方行政を支える一種の内務省外廓団体であったことも地方改良運動の一側面を示すものであったことは云うまでもない。青年団の訓練，教化はこうした内務省を中心とする地方改良運動の一翼を担うものたらしめようとする意図が大正期に入って更に強くなって来たことが，上記の訓令，通牒などによって見られるのである。

第二に，ドイツ流の軍事的青年訓練の必要を痛感したわが国軍事当局者が在来の青年団を改造して軍国的訓練を行おうとしていたことがあげられるのであって，上記のような訓令によって青年団改造の実を挙げようと最もよく努力したものは，「青年団所管省である内務・文部両省ではなく，田中大将によって統率されておった陸軍省であった[6]」ということは，当時から昭和にわたって日本の青年団の真の育成者であった田沢義鋪自身も記している通りである。そしてそれは大正15年の「青年訓練所」設置へと発展してゆくのである。毎年執行せられた徴兵検査と簡閲点呼に際して，徴兵官と点呼執行官とは，必ずこの青年団改造の政府の方針を詳述して，熱心に青年団改造を促したとも記している。

明治末期より大正時代にかけて青年団の教育活動が以上のような国家当局の大きな政策的関心の的となり，その発展が注目もされ，期待も受けることとなるのであるが，青年団自体の側に身をおいて，その育成に心血を注いだ田沢義鋪は「青年団」をどのような理念で把握していたのであろう

か？

彼は先ず「青年団」をその起源にさかのぼって，どのような課題を担って生れたものであったかということから，その本質を見きわめてゆこうとする。

田沢はわが国の青年団は，徳川時代の若者制度（更に逆れば，鎌倉時代に若者制度は発生している）にその原型をもっており，明治時代の青年団はその上に築き上げられたというのであり，この伝統あればこそ，明治以後の青年団が政府の命令ないし，奨励を待たず，また，有力な大人物の提唱や発起もなしに全国いたるところに成長発達することが出来たのだと云う。(7) それでは，徳川時代の若者団体はどういう特色を持っていたか？　徳川時代の若者団体は青年団とは呼ばず，若者組，若連中，若者仲間等の名称でよばれ，全国津々浦々に存在していたのであって，「部屋」とか「宿」とか「寝部屋」とか称する建物を中心に若々しい青年期の共同生活を楽しむと共に，およそ四つの部門の仕事を自治的に果していた。第一は，神社奉仕である。神社は部落生活の一切の中心であって，収穫を祈り，初穂を捧げ，神人交歓の祭典は部落民にとって最も重要な行事であり，青年の集団はこうした祭礼を期して極度に性情を発揮せんとした。山車（だし），だんじり，馬競べ，角力等，神社の祭典神事に対する参加は徳川時代の若者団体の中心的事業であったが，今は祭の形で残っている。第二は，町村警備の事であって，水防，消防，盗賊を防ぐ夜警，浪藉者の取締，公儀人足，村方に於ける橋梁の架設，道普請，神社改築などの共同労働，山林の保護，漁村における難破船の救助などは若者団体の仕事であって，村の自治や治安維持に尽した功績は少くなかったが，警察，軍隊，消防制度等の発達によって不用となった。第三は，修養教育であって，これは庶民階級の青年団体よりも武士階級の青年団体の方がより多く修養に力を注ぎ，武士の節義を養うことなどに努めていたようである。第四は，社交娯楽であり，青年団の発生の最も原初的，根源的要因には青年期の止むに止まれぬ社交慾，娯楽慾の発現が根底をなしていた。縁日の世話，角力，村芝居，盆踊りなど，

村のいろいろな娯楽的催し物の主役は常に若連中であった。（こうした「江戸時代の若連中」については『大日本青年団史』[8]もくわしい。）

このようにして，青年団の前身としての若者制度は民族生活の中から自然発生的に発達して来たものであったということが，田沢の青年会の本質を考える場合の重要な一つの前提をなしている。

第二に，田沢は，こうした伝統を継承しつつ，明治時代の青年会運動を復活育成した者として，広島県の一小学校教師であった山本滝之助に注目する。当時，一般の社会は青年会，ないし，青年に対して殆んど何らの関心を持っていなかった。そうした現実にあって，山本滝之助は，明治33年，18才の一地方青年として「青年会ノ起ランコトヲ望ム」という一文を作り，また，明治27年には「少年会」を設立したりしていたが，日清戦争後は，この問題を郷土の問題にとどめず，郡，県，国の問題にまで展開させた。彼は，明治29年，24才にして，『田舎青年』と題する本を自費出版し，世間では青年と云えば直に学生と思い，学生以外に，野に耕し，市に商っている青年のあることを認めない。そういう人々には青年という語さえ用いてくれないと痛憤し，また，田舎青年自身，無気力，無神経であることを痛嘆した。彼は『田舎青年』の中に次のように書いている。

「均く是れ青年なり，而して一は懐中に抱かれ一は路傍に棄てらる。所謂田舎青年とは路傍に棄てられたる青年にして，更に之れを云えば田舎に住める学校の肩書なく卒業証書なき青年なり，学生書生にあらざる青年なり，全国青年の大部を占めながら，今や殆んど度外に視られ，論外に釈かれたる青年なり。挙世滔々，青年を以て学生の別号なりとし，青年と云えば一も二もなく直に学生を以て之れに答う，是に於てか学生にあらざるものは青年たること能わず，今や都会僅々数万の学生独り時を得て膺揚濶歩し，全国青年の大部幾百万人の田舎青年は殆んど自屈自捨蟄居縮少せり[9]。」

このように学校の肩書なく，卒業証書を持たない，しかも，自ら卑屈で，無気力で，無神経で，俗悪でさえもある勤労青年をして「青年」としての自覚と自負をもたせようとして，「青年会を設くべし，青年会とは，隣里郷党

の青年相集いて一の団結を作り，相互に注意，忠告，扶掖，提携，奮励，精研する謂なり」[10]と山本は説くのである。こうした先覚者である地方の教育家，ないし，篤志家の努力によって田舎青年たちの教育・修養・娯楽を目的とする青年会が全国的に組織されはじめたのである[11]。こうして田舎青年の現実に青年会を育成してゆこうとした青年会運動の趣旨は上記によっても明らかであるように，決して官製のものではなくて，あくまでも下から内発的に民衆のものとして育て上げようとするものであった。

それでは，以上のような伝統に立つものとして青年団を考える田沢義鋪は青年団運動の本質をどのように把握していたのであろうか？　田沢の著書『青年団の使命』[12]によってその特質（客観的にそうであったか否かは別として，少くとも，彼の主観，ないし，彼のかかげた理想における）を見ることとしよう。

第一に，青年団は，自然に発生し，自然に発達した団体だということ，即ち，これは政府が命じて作らした行政機関でもなく，また，学者や思想家が発起して作った或る主義，或る思想の特殊の団体ではなくて，郷土の古い伝統に立って先輩より後輩へと自然に推移する一つの生活団体だということである。即ち，青年団員をつなぐ紐帯は，ある主義・思想に対する共鳴というのではなくて，地方生活を基礎とした青年の社交欲であり，その自然的友愛の至情だというのである。

第二に，青年団は青年自身の団体であって，自治的団体だということ，年長者が指導する場合もあくまで，彼らの自発的態度を助長するという意味のものでなくてはならない。

第三に，地方的，郷土的生活の団体であるということ，即ち，青年団は地方的単位を有するという只単に組織上のことにとどまらず，その地方の自然的，社会的環境，その地方の古い伝統などの中に青年団の生活が築き上げられることを意味する。田沢は，今や，従来の劃一主義，準拠主義，模倣主義から創造主義，研究主義，自由主義に移るべき重大な時機，外には欧米模倣，内には中央への追随という二つの病患を打破して，日本文化

の確立を計り，自発自奮，自治創造の風を起すべき時だと云い，地方生活の独自性を発揮することの重要さを説く。そして，このように，地方的特色を発揮する単位でありながら，全国的に連絡する団体だというのである。

第四に，青年団は青年期における社会生活の団体だということ，即ち，人間性の根幹である社交性にもとづいた横の集りであって，学校，訓練所等の縦の集りと異る。社交娯楽は青年期の社会生活の重大なる内容であり，共に楽しまんとする要素がある。彼はここで政府が上からある意図をもって計画した教育機関，訓練所と全く質を異にした運動（movement）として青年団を把握しているのである。

第五に，青年団は「修養」，即ち，共に伸びよう，共に学ぼうとすることを目的とするということ，そして，この修養は一般的養修であって，健全な国民，善良な公民としての修養であり，又一個の人間としての修養であって，ある思想，ある主義，ある宗教に共鳴するものとしての修養でもなく，また，軍事的修養でもないと云う。田沢は，青年団の修養は，衛生体育の修養から品性人格の修養，産業上の技術と知識の修養，国家市町村の公民としての政治的社会的修養・訓練までも含む広汎な一般的修養だというのである。

青年団の目的は青年期の社会生活の完成にあるが故に，社会生活が必然的に必要とする娯楽と修養との両方が大切であって，青年団の中心標的は，修養即娯楽，娯楽即修養であってほしいと田沢は云う。そういう意味で彼は健全なスポーツなどを大いに奨励するのであり，また，青年団を補習学校や青年訓練所の代用物たらしめることを強く戒めている。（両者の目的は別だと云う）。

第六に，青年団と政治との関係については，青年団は，断じて政党政派によって動かされるべきものではないのであって，選挙などに利用されてはならず，個人的行動であっても，団体的行動を疑われるようなことをしてはならない。むしろ，青年団は真の政治，正しい政治は何であるかを教える政治教育を積極的にしなければならない。

第七に，青年団と社会運動，思想運動との関係については，特に，農村における小作運動及び労働運動に対しては，原則として青年団は不偏不党，中立を守るべきだと云う。青年団内には地主の子供も小作人の子弟もいるだろう。資本家と労働者と，その何れもの子弟が青年団の中にいなければならぬ。従って，青年団は其の何れにも偏してはならない。青年団は地主，資本家の手足となって，新興階級の社会運動を圧迫する道具となってはならないし，また，他方，小作組合，労働組合のお先棒となって地主，資本家と戦うべきでもないというのである。

第八に，青年団の国家に対する使命としては，青年団が今結束して国家の為に積極的につくしてくれることを期待する人たちは，「中立」だなどというといかにも頼りないと思う。しかし，青年団は苗床なのであって，この苗床で育てられた，強壮な身体を持ち，剛健な精神を有し，快活な情緒と優秀な能力とを具備した立派な苗木は，或は保守党の山にも自由党の山にも，労働党の山にも移し植えられ，また，資本家・地主の畑にも，小作人・労働者の畑にも移し植えられて，国家の各階層の中に健全な国民をつぎつぎに供給することとなる。このようにして，青年団は国家に対し，また，人類社会全体に対して，立派な人間を育成して送り出すという大きな使命を担うものだと田沢は確信するのである。

以上のような理念を本質とする青年団運動の精神的基調として田沢のあげているのは，第一に，人生の勇敢な肯定であり，第二に，若者の誇りと歓びの充実実現であり，第三に，郷土愛であり，第四に，皇室を中心とする日本を愛する国家観であり，第五に，人類愛の大精神に立って，人類の理想を実現しようとする世界観である。そして，こうした青年団運動の精神的基調は，大日本連合青年団の制定した「青年団綱領」[13]に明らかに示されていると田沢は云う。即ち，

1. 我等は純真なり。青年の友情と愛郷の精神によって団結す。
2. 我等は若し。心身を修練し勤労を楽しみ自主創造の人たるを期す。
3. 我等は希望に燃ゆ。清新の意気を以て愛と正義の為に奮闘す。

4. 我等は国家を愛す。忠孝の本義を体し，献身奉公国運の進展に尽す。
5. 我等の心は広し。人道の大義に則り世界の平和と人類の共栄に努む。

以上のように青年団運動の理念を通して表現される田沢の人間形成論をより正確にとらえるために，彼の (1)青年修養論（一般教育） (2)生産者的人間の形成(産業教育)，および，(3)「道の国日本」の形成を担う国民像（公民教育）の課題，即ち，「人道の大義」と彼がよぶ理念に基いた新しい国民国家の形成を目ざす愛国心の本質等の諸点を明らかにする必要があると思う。それは明治末期より大正時代を貫いて昭和初期にいたる期間，田沢の指導下に日本全国に大きな運動となった青年団の指導理念に内在した人間観，社会観，国家観等を明らかにすることであり，一つの積極的な意味と課題とをもった内発的ヒューマニズムを含んだ「国民国家」の一つのイメージと理念の解明，および，その挫折の意味を究明することになると思う。

b. 青年修養論
——「修養」の概念をめぐって——

田沢義鋪は，さきにもふれたように，青年団の重大な目的の一つは青年自身の「修養」であり，特にそれは「一般的修養」だと云った。また，青年団は青年相互の集団的修養であり，一つの力強い精神運動となって現われねばならぬと云った。(14)

日露戦争後，伝統的価値体系の動揺する現実にあって，戊申詔書（明治41年）の渙発，家族主義国家観の確立を目ざす第二次国定教科書（ことに「修身」において「大日本帝国」から説きおこし，忠孝の大義を明らかにし，忠君と愛国とを一つとした価値体系を与えようとした)への改訂（明治44年）が行われたことをはじめとして，明治末期より大正期にかけて国民道徳論の普及運動が文部省，内務省などを中心として盛んに行われた。ことに，幸徳秋水の大逆事件を契機として，文部省は，体制擁護のイデオローグ井上哲次郎を中心に国民道徳論の普及運動を展開し，第27帝国議会

（明治44年）に国民道徳教育振興の建議を提出して採択されており，修身科を担当する中等教員の講習会を開き，井上哲次郎らを講師として「教育勅語」を更に強調解釈した綜合家族主義国家観に基いた国民道徳論を説かしめた。（井上の『国民道徳論』が刊行されたのは大正元年である）。また，内務省を中心とする国民道徳運動は，床次竹二郎内務次官のきもいりで原敬内務大臣主催の神仏基三教会同を開催（明治45年），「1．我等は各其教義を発揮し，皇運を扶翼し，国民道徳の振興を計らんことを期す。2．我等は当局者が宗教を尊重し，政治，宗教，及，教育の間を融和し，国運の伸長に資せられんことを望む」の共同決議にいたらしめている。また，さきにもふれたように，内務省の地方改良運動は動揺する村落共同体を下から強化，改良しようとして，郡長に東大出身などの青年官吏を派遣し，また，上述のように，報徳会運動を内務省の指導，援助のもとに，こうした地方改良運動にくみ入れてゆく方針をも推進していたのであり，青年団に内務省，文部省，陸軍省の協力で上からの指導の手が積極的にのびはじめたのも，更に，在郷軍人会が結成された（明治43年）のもこの時期である。

こうした当局からの国民道徳運動と相呼応して当時民間にも「修養」運動が盛んに起っていることは興味深い。当時，民間に一見内発的運動のような様相をもって勃興して来た修養運動の本質をとらえることは，当時の日本の思想状況を正しく理解する上に，ことに，当時の日本のナショナリズム，あるいは，ヒューマニズムの本質を知る上に非常に重要だと思う。当時の「教養」と「修養」とはあまりはっきりとは区別しがたいのであるが（インテリの間ではいわゆる教養主義――ケーベル門下のそれと新渡戸稲造のキリスト教的人格主義にもとづいたそれとの二つの教養主義があるが――として展開し，民衆の間では「修養」主義として展開しているように思える。），絶対的非利己主義の在り方を追求していた河上肇が一時すべてを投げうって参加した伊藤証信の「無我苑」運動は明治38年に始められており（河上肇はこの運動に身を投じた後，伊藤の主唱する無我愛とは，何

をしてもよいという人間の手放しの肯定であるにすぎないことを発見して幻滅を覚え，無我苑を去ったことは周知のことである)，「無一物で路頭に立つ」を基本理念とした西田天香の一燈団がはじめられたのも同じく明治38年である。新渡戸稲造が雑誌『実業之日本』に修養に関する文章を書き始めたのが明治41年であり，それは著書『修養』（明治44年）として同社より刊行され，つづいて『修養』の姉妹書『世渡りの道』（大正元年)，『自警録』（大正5年）等が続刊されている（新渡戸の修養の概念に関しては，『思想史の方法と対象』収録の拙論参照)。

野間清治が講談社をおこしたのは明治44年であり，『講談倶楽部』，『雄弁』，その他の大衆雑誌によって，修養主義，即ち，徳を第一としての道徳的人格完成を追求する人間形成論を唱え，それがやがて立身出世に結果としてゆきつく人生観を普及したのも大体時期を等しくしている。

しかしながら，当時，「修養」運動として教師をはじめ，一般民衆，青年層に大きな影響を持ったのは，蓮沼門三の「修養団」である。「修養団は禅の修行，接心による修養，瞑想，胆力の養成，忿怒，情慾の鎮静，偉人崇拝の精神の涵養等，自制，向上の努力としての「修養」（彼らの刊行した雑誌も『向上』と称した）を目ざし，救霊救国の大使命をかかげて修養団が発足したのは明治39年2月11日の紀元節であって，「人格向上そのために，ああ尽さなん励まなん，尊き此日に旗揚げて，丙午(へいご)の歳の紀元」と唱っている。また，「修養団の精神は『拝』の一字にきるといってよいい。一人の入団者があると，必ず神棚にあげて礼拝する」[15]というように神道的色彩が濃く，蓮沼自身は，井上正鉄(まさかね)の禊教(みそぎきょう)の信者で惟神(かんながら)の道を信ずる神道系の修養主義者であった。

蓮沼門三の修養団運動は官関係では，岡田良平文部次官（後の文部大臣)，床次竹二郎内務省地方局長（後の内務大臣），井上友一神社局長（後の東京府知事)らの後援を受けており，雑誌『向上』（明治41年2月発刊，3000部）は全国の師範学校，中学校，女学校に配布され，各地の学校教員で入団する者多く，更に，明治43年12月13日の全国師範学校長会議（於一ツ橋

教育会館）では岡田文部次官，帝国教育会長辻新次らに懇願して師範学校卒の一青年である蓮沼は45分間の演説をやらせてもらっており，その結果多くの校長たちのひんしゅくをもかうと共に，また，別の校長たちには感動をあたえ，やがて，御影師範などに修養団支部が出来るきっかけともなっている。このようにして，蓮沼の修養団は当時の内務省，文部省が音頭を取る国民道徳運動を下から引き受けて推進する修養運動を代表するものであった。

それと共に，他方，蓮沼はまた，実業家渋沢栄一に修養団の趣旨を訴えて応援を乞うた。「論語」と「算盤」，即ち，「道徳」と「経済」を車の両輪とする実業理念をその信念として堅持する渋沢に修養団の「愛と汗」の主義が愛は道徳，汗は経済とうまく適合すると共鳴をかちとり，その後，渋沢は修養団の最も重要な後援者となったのであった。（森村市左衛門も渋沢と並んで顧問であった。彼らは財的にも大きな支持を与えた）。修養団春季懇親大会（明治45年５月）は飛鳥山の渋沢顧問邸で開かれ，岡田文部次官，鎌田栄吉慶応義塾大学長，井上友一神社局長，実業家太田黒重五郎（芝浦製作所社長，彼は時々巨額の寄附をした。）らが出席している。他に後援者として，河野広中，新渡戸稲造，松村介石，三宅雪嶺，床次竹二郎，下田歌子，留岡幸助，大隈重信らが名をつらねており，また，幸田露伴，井上哲次郎，松村介石，丘浅次郎，福本日南らはこの運動に共鳴する者として，雑誌『向上』に原稿料なしで執筆することを約束している。（それにもかかわらず，この雑誌はその後売行きは悪かったらしいが）。

このように，修養団運動は蓮沼門三を中心とする民間の自発的修養運動，倫理運動ではあるが，既に明らかであるように，内務省，文部省を中心とする政府当局および，実業界の後援なしにこれほどの発展を見ることは不可能だったと云っても決して過言ではないであろう。しかし，他方，こうした蓮沼の修養団の運動に共鳴して参加し，地方に支部などをつくって協力した地方の青年たちもあったのであり，その中に，後に希望社をつくった後藤静香（長崎）もあり，また，後に玉川学園を創設した小原国芳（四

国，当時，鰺坂国芳といった）をはじめ，白土千秋，岸田軒造らもあった。このように修養団はその後，大正期を通して民間から擡頭してくるいろいろの修養運動の一つの誘い水となった観がある。修養団の支部は全国に2300もあり，その講習会に出席した者の数は600万人に及んだと云われる。

当時蓮沼の主唱した倫理運動は「七色融合白色倫理運動」とよばれたのであるが，彼にとって修養——倫理ということは「神」をはなれてはありえないのであって，「(1) へりくだって神を仰ぐ，(2) 浄めて神に近づく，(3) 奉げて神に交る」を中心とするが，彼の神観は俗に云う神道的神観である。（蓮沼氏が最近筆者に語ったところによると，「神」とは頭の髪もカミというように，上にあるもの。親は子より神に近く，先祖はもっと神に近いというような神観をもち，日本の天皇は人民の選挙によって選ばれた人ではなくて，この「神」によって上から与えられた方であるからいづこの国のなりたちよりも日本の国体は尊いと云う。そして，日本のみが世界平和のために働ける国だと云うのである。）彼は，特定の宗教の立場はとらず，七色が合すると白色となるように，すべての宗教を合せた「白色」倫理運動を唱導した。それはシンクレティズムの一典型とみることが出来よう。

「修養団」運動の紹介が少し長くなったが，それは，田沢の青年修養論ないし，青年団運動が蓮沼の修養団と密接につながっていた面がある関係から，修養団の特質を明らかにしておく必要があると考えたからである。青年団の目的の一つは「修養」だと云った田沢義鋪が蓮沼とはじめて逢うのは，田沢が静岡県安倍郡長（当時日本の三大名郡長と云われたのが田沢，前田多門＝群馬県群馬郡，津崎尚武＝長野県更科郡の三人であった）として，地方の青年たちのための天幕講習を行っていたころである。天幕に青年を宿泊させて心身の鍛錬をやっている田沢の教育方法に共鳴を覚えた蓮沼は，その後田沢と組んで天幕講習会をするようになるのであって，大正4年8月に福島県の磐梯山麓の檜原湖畔で修養団第一回の天幕講習会が開かれた時は，国民新聞は大々的に之を予報し，意想外の大反響をよび，文

部省は進んで全国の師範学校と農学校に推薦状を出すという協力ぶりであった。指導者は田沢，蓮沼らであった。これが非常な成功におわり，それに力を得て修養団ではその後毎年，一，二回，盛夏の頃に富士の裾野の白糸滝畔，赤城山上大沼湖畔，日光中禅寺湖畔，阿蘇湯の谷等々，全国各地の名勝の地を選んで同様の天幕講習会を開催した。蓮沼氏談によると，田沢は当時，蓮沼の云う「白色倫理運動」以外にないと云ったとのことであるが，田沢の修養団に対する気持を下村湖人はその伝記『田沢義鋪』の中で次のように書いている。

「弱い善は善ではない。善は強くてこそ真に善といえるのだ。断乎として悪と戦う善の力の結集，これを外にして自分の進むべき道に何があるというのだ。……善の力の結集に欠いてならないものは，宗教的信念と血に彩られた実践力だ。この二つを欠いては教化も指導もない。そして見渡したところ，この資格をそなえた団体は，蓮沼門三の率いる修養団の外にはないではないか。そうだとすれば，自分の力をこの団体に集中するのに何のためらうことがあるのだ。」(15)更に，大正10年，顧問渋沢子爵の招待で銀行集会所に於て修養団の後援を各界有力者たちに懇請することになった集りで説明役を引受けた田沢は，修養団の運動が自分を動かすのは，その幹部が創立以来16年一日の如く血を分けた兄弟のような親しみを以て協力一致，国民道義の振興のために奮闘していることだと云い，講習の場合には寝食を共にするのは勿論，寒中自ら先んじて水にも飛びこみ，裸体々操もやり，便所掃除もするといった実行実動にあると云っている。(17)内務省書記官の地位にあった田沢は修養団の理事にもなり，全国各地をめぐって青年たちに話す機会のある毎に修養団の宣伝につとめ，7 カ月に 2000 人—3000 人の会員を獲得したということである。

このように田沢は蓮沼の修養団と運動にあっては非常に密接な関係にあったのであるが，「修養」という概念の把握においてはどうだったのであろうか？

田沢は『青年如何に生くべきか』の中で修養について次のように書いて

いる。「修養を忘れた青年は真の青年と云うことが出来ぬ。一体修養とは何であるか。簡単に云えば，自分を伸ばし，自分を磨くことである。他の語で云えば，自己建設，自己完成の努力である。真に生き甲斐のある一生を送り得るような自分を作り上げること，即ち真に人生の意義を全うし得る自分を作り上げること，之が修養である。……精神も，肉体も，智識も道徳も，技術も手腕も，自己の内部に宿っている一切の美しきもの，貴きものを，極度に護り育てて之を伸長し発達せしめて行くことが即ち修養である。」(18)

更に，田沢は，修養の出発点は志を立て，願いを発することだと云い，自分も立派な人間になって見ようと決心することだと云う。立派な人間とは何か？　それはいわゆる大臣大将富豪のことではなく，生きがいのある生涯を送ることの出来る人間，人生の意味を真に全うすることの出来る人間だという。このように青年の人間形成に関して田沢が「人生の意義」の発見，正しい人生観の確立の必要を終始主張し，自己の内部に宿っている一切の美しいもの，貴いものを護り，育て，伸長発展させてゆくものだと説いている点，当時の国民道徳運動を貫く教育理念とは人間形成論の出発点を異にしていることが，明らかに見られるのである。

田沢はその著書『青年修養論』(19)の序文の中でも次のように書いている。「一切の教育の根柢は結局人生の意義の正しき理解とこれに伴う信念の確立にある」。更に，人間は「一生修養の意義込みでなければならぬ。殊に青年期に於ては一層修養に努めなければならぬ。ところで修養には一つの目標がなければならぬ。……これを理想と称する。……正しい目標即ち理想は何うして出来るかというに，それは正しい人生観から生れて来るのである。人生観とは何であるか。我々の一生の生活の意義，即ち人生の意義を何と考えて行くか，その考え方が即ち人生観である。この人生の意義が明らかにならねば，善悪の標準も立たず，修養の目標もはっきりしないのである。」（第１章「人生の意義」）

そこで田沢は勇敢な人生肯定の積極的人生観の確立の要を説く。一切の

虚無的，厭世的，逃避的思想，あるいは諦めや捨鉢の態度を否定し，「堂々と勇敢に真正面から我等の人生を肯定する」積極的な人生観を確立せよと云う。

田沢の人生観は一貫して明るく，前進的である。「我々の生命は光に充たされ，希望に輝き，躍進して人生の戦に邁進する。……一切の絶望と悲観とを尽く拋(なげう)ち去って赫灼たる光明の中に身を躍らして飛び込んでゆく。そういう心境で我々は修養の一路を進みたいと思う」[20]と云う。そして，彼はこうした明るい，積極的人生観の確立を目ざす修養の工夫をいろいろ提案する。たとえば，失望したり，悲観したりすることがあると高い山に登って黎明の大気を呼吸せよとか，精神力集中，断行の勇気，継続，蓄積，熟練の努力，「一事貫行」「万善簿」（広瀬淡窟の修養法にならって）をつくり，善を行ったと思った時は丸星をつけ，悪い事をしたと思った時は黒星をつけ，その差が一万になるまで努力しようというようなことも提案する。

以上でも明らかであるように，田沢は日本の精神的伝統，伝統的教育思想に特有な修養観――心の持ち方を修練し，身を修め，善を行う人間に自らをつくり上げるために努力しつづける自己形成法としての修養観を継承しながら，それを積極的，創造的人生観にと発展させてゆこうとしているように思える。

第二に，田沢は人間を「全一思想」と「個在分立の思想」との綜合においてとらえようとする。彼は，一方，縦には祖先より子孫に伝わる永遠の大生命を有し，横には複雑無限の内容を以て一切の人々を抱括する大存在とみる「全一の存在」の思想があり，他方，人生は自分一人だ，人間は一人で生れて来て一人で死んでゆく，最後の頼みになるのは自分だけだという「個在分立」の思想があるというのであるが[21]，これは全体主義的思想と個人主義的思想との田沢的把握と表現とみてよいと思う。彼は若し全一論が個々の存在を無視し，個人の人格を認めず，個性の尊さを考えないならば，それは人生論として誤れるの甚しいものである。真の全一論は決して個々の存在や個性の尊厳を無視しないものでなくてはならぬと云い，個々人の

人格の尊厳や生活難を無視するような国家主義は真の国家主義ではないと云う。

このようにして，田沢の修養論は，単なる個人主義的個の確立でもなく，また，国家のための滅私奉公的，没個我的人間形成でもなく，全体とのかかわりにおける個的，人格的人間形成を追求しているものと見ていいであろう。「我々一人一人が全一の表現者である。我々一人一人の表現者を無視しては，全一は一つの空理となって実体がなくなってしまう。……全一を表現し得る精神的要素は即ち『愛』である。愛なくんば全一なし。愛によって我々は我々個体の存在を越えて全一の大生命を把握することが出来る。……人々の努力によってのみ全一は進展し，国家は繁栄し社会は向上する。」(22)

このようにして，田沢は「全一の無限の進展，即ち，複雑無限の関係に於て，相互に依存している人間の世界が，理想を追求して永遠に伸展することこそ，我一人の人生にあらず，我一代の人生にあらず，初めなき初めより，終りなき終りまで永遠に続き，而かも一切を包括する大人生の意義である」というのであって，歴史的（時間的）縦のつながりと空間的横のつながりとの両方の綜合において社会的，あるいは，人類性への進展の可能性をもった国民的人間把握とその課題の積極的な担い方を明らかにしようとしているのである。

第三に，田沢の思想にはある宗教的な要素が含まれている。彼は，社会人生の現象ばかりでなく，宇宙大自然と我との関係において矢張り全一観を考えざるを得ない欲求が魂の底から湧き起って来るのをどうすることも出来ないと云い，「こういう魂の欲求が宗教の心，信仰の心であろう。同時に，その目に見えない大きな存在こそ神とも云い，仏とも云ってよいのであろう」と云う田沢は，その目に見えない大きな存在，永遠の生命とも云うべきものを「大いなるもの」と表現する。人間はその大いなるもの（神とも云い，仏ともいうが，いづれの表現をとっても宗教上の争いになるから，差し障りのない「大いなるもの」という語で私の気持を現わした

いのだと彼は云う）を求めて生きる宗教的存在であり，永遠なる光を憧憬するものだと云うのである。

更に，田沢は彼のいう「大いなるもの」を次のように規定する。「大いなるものよ　汝は一切を包括す。人も鳥獣も山河も日月も，一として汝の外に出づるを得ず。大いなるものよ，一切の力は汝の力なり。春雨に浴し春光に育くまれて草木の伸びゆく力，蟻蜂春夏の営み，人間一切の努力，尽く汝の力にあらざるはなし。一切を包括し，一切の力を有する大いなるものよ。汝何処にか在ます。天上遙か星斗爛干たる処か，或は又西方十万億那由陀（ナユタ）の彼土（ヒト）か。あらず，あらず。……大いなるものは一切のものと共にあり。一切のものに汝の姿を見る。されど一切のものと共にわかれてあるにはあらず。大いなるものは飽くまで只一つなり。即ち全一の存在なり。全一の基礎を忘るるに至らば，これ大いなるものに対する叛逆なり。心を空うして大いなるものに仕えよ。力を尽して大いなるものに捧げよ。かくて始めて大いなる生命に生くるを得ん。」(23)

ここにとらえられている「大いなるもの」とは宇宙大自然の生命ともとれるし，すべての存在の基盤ともとれるし，汎神論的神観の一つの表現ともとれる。それは万物の創造主，絶対的，超越的人格としての神では明らかにないのであり，非常に東洋的な神観だとも云えよう。そして，こうした詩的でさえもあって，自然生命そのものに近い「大いなるもの」としての神観は，真の宗教的人間把握の基礎にもなりうると共に，自然主義的汎神論としては，歴史の中の物的なすべてのものをそのまま大いなるもののあらわれとして肯定する立場にもなるのである。田沢は云う。「国家も，社会も，一木一草も，庭前に嬉戯している犬ころも，軒にさえづっている小鳥も，或は又青年団も，在郷軍人会も，農会も，商工会議所も，学校も工場も商店も，一切のものは大いなるものの現われであり，神仏の現われである。宇宙の大生命がそういう形をとって現われ来っていると考えずには居られない。」(24)

この「大いなるもの」が，神や仏とも云いかえられると共に，国家とも，

在郷軍人会とも手放しに云いかえられる時，「我を忘れて大いなるものに仕えよ」，「己が力を挙げて大いなるものに捧げよ」，「大いなるものの生命を我が生命として生きよ」が，国家や軍隊への自己没入を指示するものとして受けとられることにもなりかねない危険性がここには充分に含まれていることを見逃がすことは出来ないのである。（この問題はあとで再びふれる）。しかし，田沢自身はもっと大らかな，詩人的宗教意識をもって，「大いなるもの我と共に在ます。何処までも正しき方向に向って渾心の努力を捧ぐることこそ，生を人間に受けたるものの当然のつとめ」[25]だと説くのであり，国家や社会をもより正しくあらしめているよりどころとしての「絶大にして永遠なる大いなるもの」の生命をわが生命として生きることを修養——人間形成の課題と考えてもいるのである。

ただ，田沢の「修養」の概念の根底には，わが国の精神的伝統にある諸々の「修養」観が綜合されているように思える。さきにも触れた教育者，広瀬淡窓の「万善簿」，あるいは「一日一善」，「向上日」の設定などいわゆる克己，勤勉による人格完成の努力としての修養観を明らかに継承している。こうした克己・勤勉の修養観は，それが普遍的価値規範の実現にむけられる時は，積極的，創造的エートスとなりうるが，無原理の勤勉主義である場合も多い。その場合は，講談社文化などの修養主義[26]や世渡りの道などにもその例をみるように，無批判の現体制肯定を基礎とした立身出世主義に直結，ないし，帰結することも多いのである。

また，田沢が大いに共鳴し，天幕講習会等に積極的に協力した修養団の蓮沼門三の白色倫理運動なるものが，蓮沼の神道的神観に基いたシンクレティズムを特色とし，国家観を骨としており，人間形成も胆力の養成，禅的修行，慾情の鎮静，自制，偉人崇拝などが強調されるのであって，田沢の修養論に見られるような主体把握とその形成の要素を欠くものであるにもかかわらず，それに異和感を必ずしも感じない側面があり（修養団の「実行実動」に素朴に感動してしまっていて），それは，やがて国家神道と結合した超国家主義，宗教的国家観などに対して無防備な青年たちを育成

することにもなったのではないかと考えさせられるのである。

他方，第五高等学校以来，生涯を通じて田沢と親交あり，大日本青年団講習所長として田沢と青年指導の上の最も近い同志であった下村湖人は，日本に有数の少年の人間形成論を取扱った小説として広く愛読された『次郎物語』の中で「正義感」を葉隠四誓願（はがくれしせいがん）の一つである「大慈悲」の精神と関連させてとらえており，愛される喜びから愛する喜び，運命にうち克つ新しい道をさし示そうとし，「白鳥芦花に入る」[27]（真白な鳥が芦花の咲く芦原の中に舞い込むと姿は見えなくなるが，その羽風のために今まで眠っていた芦原が一面にそよぎ出す。『次郎物語』はそういう風に他の人々に影響を与える生き方を尊んでいる），「無計画の計画」といった考え方をもって青少年たちに愛と道義と自由の精神を滲透せしめようとしているが，そこには，禅宗の『臨斉録』や親鸞の『歎異抄』など伝統的な宗教的，道徳的感覚を豊かにすくいあげながら，それを更に積極化し，実践化しようとし，自由主義を志向しようとする姿勢が見られるのである。そして，それは，軍国主義に屈服することを肯んぜず，青年講習所長を辞任した下村湖人自身の生き方にも通じるのであり，田沢にも共通する面がある。

そういう意味で，田沢義鋪や下村湖人らの修養論は，多分に日本の伝統的道徳思想や宗教思想を基礎にもちながら，それを，個人を尊び，主体的個人が全体（社会，国家，人類）に奉仕するものとしての人間観，正義と愛と自由を目ざす実践的人間形成へと新しく展開を試みようとする側面も含まれていたと云えよう。

しかしながら，田沢の人間形成論は修養論の基礎に立って，更に，人間存在に目標を与えるものとしての「道の国日本の完成」という理念と共に考察されなくてはならない。

c.　「道の国日本」の形成を担う国民像

田沢義鋪は，青年団の使命は一般的修養の基礎工事の上に公民教育と産業教育の二本のレールを引っ張って日本を理想の彼岸に運ぶことだと云っ

たが，彼の公民教育の理念の基礎には「道の国日本」という思想がある。はじめにも触れたように彼が学生時代，日露戦争後の満鮮地方を旅行した折，「道義なくして何の国家だ。日本は東洋のならず者になってはならない。」と痛感し，人類的，世界的国民性の涵養の必要を肝に銘じて帰って来たのであるが「道の国」，あるいは，「道義国家」という考えは田沢の生涯を通じて青年の人間形成——国民教育の重要な基底をなす理念であった。

それでは，田沢がいう「道義国家」とはどういう国であるか？　「人類生活の理想，即ち，人生の道が国家を指導し，国家が道の行わるることを保障する——こういう関係に立つ国家こそ，真に人類の幸福と両立し得る国家，否，人類の幸福の為めの国家と云い得るであろう。こういう国家を称して私は『道義国家』，或は，『道の国』と称する。」[28] それでは，「人生の道」とは何か？　田沢は「人生の道」とは「人類生活の理想」だと云い，それは，「一切の人々が，一所になって，何処までも理想を追求して進展してゆく」ということであり，「我が進むが為め人を押しのくるのではない。自分の幸福の為めに人を傷けるのではない。皆の人々が互に助け合い，励まし合い，さらばと云って，他から制肘を受くるのでなく，各々その生を楽み，各々その天命を全うしつつ，始めなき始めより，終りなき終りまで，無限に永久に，より美しく，より幸福に，より正しく，より貴く，何処までも理想を追求して進んでゆく。之れが人生の意義であり，人類生活の理想である。私は之を『全一無限の進展』と云う。」[29] 田沢はこのように，非常に観念的，かつ，理想主義的に「道」を定義する。更に，この進展の生活は必ずしも精神生活の方面だけではなく，物質生活の方面に於ても，より便宜に，より豊富に，より幸福に，その生活の要求を充足してゆくことを含むと共に，ただ，我れ一人ではなく，全一の進展，即ちすべての人の幸福でなければならないと云う。

田沢は，『道の国日本の完成』の中で無政府主義や共産主義を批判すると共に，軍国主義を征服欲，支配欲，領土拡張欲，物質欲を満足せしむるものでよくないと云ったあと，次のように書いている。

「私は，国家経営の根本原理として，この軍国主義，帝国主義，征服主義にも賛成することが出来ぬ。一体人生の意義は，総ての人々が各々其の生を楽み，各々その天分を全うし，祖先より承け，子孫に伝え，漸次よりよき社会，より幸福な社会と，理想を追求して無限に進展してゆく処にある。私は之を称して『全一の無限の進展』と云っている。全一，即ち，全部にして只一つの大社会，大人生が，より幸福に，より美しく，何処までも進んでゆく。そこに人生の意義があり，理想がある。我一人の幸福ではない。総ての人生の幸福である。我一人の進展の為に他を傷けてはならない。総ての人々が段々理想に向って進んで行かねばならない。総ての人々の幸福は平和の上にのみ築かれ得る。従って云うまでもなく，社会の平和は，人類の理想でなければならぬ。個人間に於ても愛とその結果としての平和が理想である。階級間に於ても，利害の不一致に基く主張の相違と，合理的手段によっての主張の争とは，社会進化の当然の過程であるの故に許されなければならぬが，直接行動によっての階級斗争は，明かに人類生活の理想に反するものと云わねばならぬ。同様に国家間の問題に於ても然り。国家間の戦争が何としても，道に反することを一切の人類は，はっきりと認識せなければならぬ。」(30)

ここには，社会的，人類的理想を平和的に追求しようとする立場が強烈に表現されている。国際間の問題も，国内問題も共に，武力戦争，侵略戦争，あるいは直接行動，暴力革命，階級斗争等によらず，人類的，また，社会的連帯観念に基いて，合法的で政治的な，そして，教育的で道徳的な平和的手段によって社会正義を樹立することを提唱する。そして，こうした人類的理想に生きる国こそ「道義国家」だと田沢は云うのである。

第二に，田沢は，日本こそ，このような道義国家，道の国に最もふさわしい国家だと云う。それはなぜか？　田沢はその理由として日本の国民性と国体とをあげる。彼は先ず，我が国民性の美点として，「義勇奉公の精神」と「外国人に対する寛容の態度」（平和愛好的態度）とをあげている。彼は，他国の不正不義の主張の故にわが生存を脅威され，正しい利益が蹂

躙される時にのみ我国民は国防戦において外敵を制圧するだけの用意と勇気とを持つのだと云うが，それはあらゆる国民が戦争に突入する場合にかかげる共通の大義名分ではなかろうか？　そして，日本の国民性が特に外人に対して寛容，平和愛好的だということは，田沢自身が旅行して衝撃を受けた満鮮における中国人苦力などに対する日本人の非人道的取扱い方などを考えても矛盾している。ここには青年期の田沢の現実認識に比して多分に日本の国民性の観念的美化が見られるように思う。

日本の国体の尊厳無比の理由としては，万世一系の皇室をあげ，ことにその血族社会の自然的発展であること，即ち，他民族の征服，被征服関係をもたない，単一血族社会における情愛の結合を主とする血統という点をあげる。(大和民族以前の先住民との関係は大和民族の優秀性による同化と解釈する)。更に，国体の尊厳の第二の根拠として，日本の建国の精神は，天の岩戸の神話によって典型的に示されているように，天照大神という，一面，血族団体の母であり，他面，「太陽と賞め嘆えるほどの大人格，大徳の所有者」を中心とする社会結合の在り方に見出せるのであり，歴代の天皇はこうした特質を備えた天照大神の延長だと田沢は云う。皇室の統治権は国民の情誼の生活の中心，道徳生活の中心であるということによって裏づけられており，そこに日本における祭政一致の特色がある。また，そういう意味で日本では皇室が絶体に無条件に国民全体の代表者なのであり，日本の皇室には暴君は絶対にいないと云うのである。

以上のように，日本の国体の特質を，万世一系の皇室にありとし，その皇室を日本国民の血族社会の中心であり，道徳的，精神的生活の中心であるところの平和的，情愛的人格性によって裏づける田沢は，国体を否認し，皇室に反抗しようとする共産主義者，無政府主義者を不逞の徒として拒否すると共に，皇室を特権階級の守護神とする立場をも情ない限りと云うのであり，社会主義であれ，何思想であれ，その主義・思想が真に国民全体の幸福を増進するものであったなら，皇室があるが故に最もなだらかに，そして，最も都合よく，その主義思想がわが国家に行われるであろうこと

を知らなければならぬと云う。このような立場から田沢は左派に対しては，「皇室の思念せませ給う処，常に国民全体の幸福にあり。諸君の努むべき処は，諸君の主義思想が，真に国民全体の幸福を増進するものであることを，国民の良心と理性の前に立証することでなければならぬ，それさえ出来れば，皇室は常に諸君の強力なる支援者である。諸君は社会運動，労働運動にたづさわるに当って，深くこの一事を考え，常に皇室尊重の態度を明にしなければならぬ。」(31) と云うのであって，皇室尊重の態度を明らかにすることなしにはいかなる思想も国民思想として定着しえないと云うのである。

他方，右派，即ち「右傾思想家」，「反動主義者」に対して田沢は次のように訴える。「諸君はその思想戦に従事するに当って，動(やや)もすれば自分達だけが皇室の御味方であって，自分達の思想に反対の人々は尽く皇室の敵であると云うが如き態度を取ろうとする。或は非国民と呼び，乱臣賊子と称して，反対の思想を罵らんとする。併しこの態度は，……却って陛下の赤子を駆って，余儀ない皇室の敵たらしむるが如き結果を招き易い。我々は決して思想戦の渦中に皇室を巻き込んではならぬ。」と云い，国民の間には思想の戦を開き，どの思想が国民全体の幸福を増進するかについて国論が大体定まったところで，皇室に之を実行してもらえばよいと云うのである。

このように，田沢は，皇室をあくまでも特定の人々の「敵対物」，ないしは，「専有物」たらしめることを避けて全国民的な道徳的人格的存在にして，しかも，すべてを超越する価値の拠り所たらしめ，その尊厳無比の国体の下に美しい社会を建設しようと云う。「道の国日本」の建設は祖先より子孫に伝える民族共同の大芸術，大創作だと云うのであって，新日本の標語は「美わしき国体の下に美わしき社会を建設せよ」でなければならぬ。美わしい国体のもとに，一方，合理的な政治の手段によって社会改良，他方，心の修養によって社会の道徳化，これこそ雄大崇高な昭和維新の課題だというのである。そしてそれを基本的にささえる大和民族の人生観は，

「わが祖先が有しておった宇宙観，宗教観，人生観，社会観等の綜合されたる『神ながらの道』でなければならぬ。」[32]と云い，中臣(なかとみ)の祓(はらい)の祝詞(のりと)などを引用し，神道的な楽観的伸展主義，平安主義，全一主義，一体主義等をあげている。

以上，田沢義鋪の「道の国日本」「道義国家」という概念には，すべての人間が互に助け合い，精神的にも，物質的にも，より豊富な，より幸福な生活を共に実現してゆくことを求める人類的理想主義，および，個人間や国家間に社会正義を実現してゆく上にも，それをあくまでも平和的に追求してゆこうとする暴力否定の平和主義が明らかにみられる。他方，万世一系の皇室（天照大神＝歴代の天皇）を第一に，日本民族的の血族社会結合の中心，即ち，民族共同体の長であり，第二に，国民道徳の人格的中心，即ち，日本国民の精神的，道徳的拠り所であり，更に，第三に，統治権の総攬者，即ち，日本国の政治権力の頂点であるところの諸特質を具現したものとする天皇観が，「道の国日本」の基盤としてとらえられているのである。ここには，普遍的，人類的であるのとは，逆に，最も日本的，特殊的であるところの超国家主義の精神主義的イデオロギーがローマン主義的感覚でとらえられ，詩的に美しくうたいあげられていることを見出すのである。

田沢の「道の国日本」という概念は，以上のように，人類的，理想主義的要素と皇国主義的要素とのローマン主義的な結合であると云ってもいいのではないかと思う。

大正4年，田沢が内務省より明治神宮造営局総務課長に任命された時，彼は，この御造営の事業に全日本の青年たちの心を生き生きと結びつけたいとねがい，全国の地方青年団の労力奉仕によってこの大事業を仕上げようとする案を立てたのであり，彼がかって郡長として青年団の育成につとめた静岡県安倍郡有度村をはじめとして全国の青年によびかけた。するとたちまち全国各地から申込みが殺到し，280余団体，18才から25才までの粒選りの青年が1万5千人，延日数15万日の奉仕となって，明治神宮は

出来上ったのであった。（彼らは造営局急造のバラック宿舎に共同生活を営み，日中は労務に従事し，朝夕は講演をきいたり，懇談したり，修養的諸行事をやったりした）。これら青年たちの純情は，日本国民の民族共同体の中心であり，また，精神的，道徳的中心でもある皇室——明治天皇への義勇奉公の真情と憂国の熱情としてひたすらささげられていたのであり，当時，田沢が放送でも紹介したように，この労力奉仕に参加した一人の純朴な青年大工の次の歌に彼らの気持がよく吐露されている。

宮造りまごころこめて打つ槌は
　　高天ケ原にながくひびかむ

こうした明治神宮造営のための労力奉仕は，田沢の主張するところの国体観を全国農村の勤労青年たちの魂にふかく新に，鮮明にきざみつけ，その結果，かれの念願する道の国日本の完成の大事業に彼ら青年たちを自発的に参加せしめることであった。神宮の社殿が完成し鎮座祭が行われたのは大正9年11月1日であった。田沢は陰に陽にひろく世論の喚起につとめ，また，当局に献策して，「全国青年団明治神宮代参者大会」を計画し，11月21日から1週間にわたり，内務，文部両省主催で行い，当時300万と云われた全国の団員の代表を各郡市区から1名づつ選ばせ，総計697名が参加した。この期間，皇居を拝するために早朝二重橋前に整列し，たまたま皇太子殿下が陸軍大学の卒業式に行くところに出逢い，「間近に殿下の英姿を拝する機会を恵まれた」というような演出もあり，更に「何の資格もない」青年代表を御殿に招かれ，「国運進展の基礎は青年の修養にまつところ多し云々」の令旨を賜わるという「感激的」出来ごともあり，更に，第3日の明治神宮正式参拝の日は代表が参拝すると同時刻に，全国3百万の団員は各自の職場である田園，工場，商店等から一斉に神宮に向って遙拝を行う[33]という風に「明治神宮」を媒介として皇室への献身の気分を全国的にもり上らせるよう周到に計画されたのであった。更に，皇太子の令旨奉戴の感激を永久に記念すべき方法を代表たちが討議し，決定したことは，全国の団員が一人一円ずつ醵出して，神宮外苑の一角に全日本青年の殿堂

を建設しようということであった。このようにして出来上ったのが日本青年館である。この日本青年館の開館式において，田沢が行った記念講演の題は「道の国日本の完成」であった。更に8年を経て同じ題名のもとに彼がまとめた著書に詳述された「道の国日本」,「道義国家」の理念こそ彼が早くより全国の青年たちに訴えようと念願してやまなかった理想主義的皇国思想であり，皇室中心の国体観であり，愛国思想であった。そうした「道の国日本」の形成を担う国民像の育成こそ田沢が青年団運動を通して追求してやまないものであった。そして，そうした観念は，今述べたような感激的演出による諸行事，体験を通して，全国農村青年のふところに深く定着して行ったのである。

田沢は彼特有のローマン主義的，理想主義的皇国観を「祖国の芽生え」と題して，次のように唱い揚げている。

「見よ，御年若き我等が陛下が，祖宗の遺話と蒼生の翹望とをその一身に集められ，底つ磐根(いわね)に太しく立てる玉座を踏まえ，空満つ光のかなたに，進んでやまざる追求の瞳を投げさせられたる——ああ，その英姿。思いても見よ。『祖国の芽生え』，われ等の心は感激にふるう。満天下の青年諸君！　われ等をして諸君と共に偉大なる群像を画かしめよ。中央に立たせるわれ等の若き陛下を囲みて，見よ，幾万の青年ぞ。若き帝の指し給うひんがしの方には，やがて豊さかのぼるべき旭日はいまだ地平線下に隠れて，ただ彩雲の中にその強烈な輝きを匂わしている。すべては暗より光への過程である。万衆の表情は，現実のいたましさと醜さとに印せられたる苦悩の影をやどしながらも，光を仰いで，歓喜と希望にその瞳を輝かしている。その胸は張り，肩はそびえている。而かもその両足は，神代ながらの大巌磐(だいがんぼん)をしかりと踏まえている。

おお偉大なる群像の画，題して『祖国の芽生え』と云う。」(34)

こうした若い皇太子を中心として，神代ながらの大巌磐の上に立つ青年群像に祖国の芽生えを見るという明るい希望にみちたローマン主義的皇国観と国民像の明示は，明治天皇没後の悲しみをこえて，更に新しい日本の

形成を担ってゆこうとした大正初期の青年層を激励するささえとなっただけではない。やがて昭和時代に入って満洲事変が起り(昭和6年)，京大滝川事件が起り，長野県左翼教員200人が検挙され，ファシズム抬頭期の臣民教育の強化された第4期国定教科書が公布された昭和8年を経て昭和9年にかけて田沢の『道の国日本の完成』は24版を重ね，広く影響を与え，また，反響をよびつづけた。(当時の日本青年館編集部長熊谷辰次郎氏談によると，この本は昭和15,6年まで売れつづけ，10万部は出たということである) 美濃部達吉の天皇機関説が排撃され，国体明徴運動が起るのは昭和10年である。田沢の「道の国日本」の思想の中に結合された人類的，平和的理想主義と神話的，万世一系的皇室中心主義の国体観，皇国観との両要素のかかわり方は，当時の超国家主義的国体明徴論者たち，あるいは開明的理想主義的愛国者たちのいずれによってもよく見分けられていたのであろうか？　一方，その神話的，皇室中心主義的国家観は，開明的，人類的，理想主義的オブラートに包まれていたが故に，より広く理想主義者や素朴な農村青年たちをも抵抗なしにその中に包み込むことをえしめたのであり，また，他方，その中に含まれた神話的皇室中心の国体主義の故に，超国家主義的国体明徴論者や軍国主義者たちにその同盟軍と目され，彼らの陣営へと引きづりこまれてしまったのではなかったであろうか？

d.　篤農青年の育成と移植民教育策

田沢義鋪が，青年教育において力をそそいだ一つの側面は産業教育——生産者的人間の育成であった。ことにそれは農村を基盤とする生産者の教育であり，また，彼らによる郷土の建設であった。「青年団は先づ農村に起り，農村に発達する。……わが日本の青年団員は欧米の青年運動と異り，殆んど全部産業生活を営んでいる。従って，この産業生活の充実，産業方面の修養が青年団にとって重要」[(35)]だと田沢は云う。

農村青年，産業青年の教育において，田沢が第一にあげるのは，勤労教育，篤農青年の発見，および指導である。真の社会教育の眼は，草深く土にまみれて埋っている宝玉を発見することだと云うのであり，人生の価値は家柄，学歴，容貌，身なりなどにあるのではなくて，この大地に捧げる努力の姿，研究倦まない向上の精神だと云う。こうした勤労の価値の発見——価値標準の転換，即ち，価値観の変革，人生観の改造こそ基本的に重要だと云うのである。田沢は『青年修養論』の中でも，勤労のない人生は成り立たないと云い，金がないから，喰えないから働くのではない。金はあってもなくても，喰えても喰えなくても，人間の道として我々は働かねばならない。勤労は道徳だとさえ云っている。

田沢が，雑誌『大成』に連載し，後，それをまとめて出版した著書『私を感激せしめた人々』(36)の中で取上げている人間像はすべて農村や工場や炭坑で働く人間，即ち，生産者として立派に，かつ，研究的に生きる勤労青年たちである。大学を卒業しても就職難でぶらぶら遊んでいる人の多い中に，大学にも専門学校にも行かず，高等小学校か地方の農学校くらいの学力で，鍬を持って田園に立ち，稲の新品種の発見，害虫の研究，葡萄や蕓苔の研究，宅地利用，促成栽培の研究等々に立派な成果をあげる青年たちを，本当の実力で立つ青年，田園に立つ無名の英雄児と讃えている。彼は勤労の意義と価値を説くと共に，農村青年たちに「一人一研究」，あるいは，「共同研究」をすすめ，また，農家経営の合理化をもすすめている。(部長時代の彼が大正3年に静岡県下の蓮永寺ではじめて青年講習会を持った時も70円のお金の有効な使い方を青年たちに考えさせ，養鶏改良案についてのすぐれた答案に一等賞を与えたことなどもこうした関心が早くよりあったことを示すものと云えよう)。そうして，田沢はこうした農村青年たちの研究成果を篤農青年大会や展覧会において発表させた。彼はまさに文字通りの「篤農」の育成者であった。田沢は，都市生活の模倣をやめて，衣食住の生活の在り方においても，文化の質においても，農村生活の独自性を尊重することの大切さを説き，よりよき郷土の建設を力説した。そして天

皇陛下より自治制というものを与えられているのであるから，出来るだけ自治心をもって自分たちの町村を自分たちの力で理想の町村にするよう努力せよと説いている。(37)

当時の農村は，田沢自身も書いているように，「数年来の不況でどの村も，どの部落も，どの家も困りはてていた」(38)のであり，2・26事件の青年たちの蹶起の背景をなす要因に農村の深刻な窮乏のあったことは周知のことである。その青年将校の一人，末松太平著『私の昭和史』もそれを強調して書いている。(39)昭和7年には農村の欠食児童数は20万人と記録されている。田沢の勤労の強調に理想主義的篤農主義の意義も認められる反面，農村更生を，国家の経済政策の立て直しにふれることなしに，個々の農民の篤農主義的努力によって実現しようとする観念論的精神主義の濃厚であることはいなめない。

社会問題へのこうした観念的，精神主義的アプローチは，労働者教育においても同様であり，後，彼は渋沢栄一らの要請によって協調会に常務として入り（大正8年），全国の農村青年に対する天幕修養会と同様の方法で労務者講習会(40)を重ね，労働者の思想を変え，人間的修養をつませてゆくことによって労資の協調を計ろうとした。そこには個々の労働者を立派な人間に育成するという人間教育の永遠的，普遍的課題の真理がある反面，彼は，労働青年が己が階層の負う社会矛盾に眼をむけようとする思想状況を国家の将来のために憂うべきことと心配するのであって(41)，彼自身，社会主義に対して決して無理解ではなく，ある同情はもっていると思えるのであるが，労働階層の担う社会矛盾の解決のために積極的な改革の姿勢をとろうとはしていないのである。

第二に，田沢は，農村青年の勤労教育の一つの適用として，次三男の移植民教育をあげる。農家にとって次三男の処置は極めて重大な問題である。将来の方針も立ててやらずに，何時までも兄の家に無駄奉公をさせておくと，彼らは自暴自棄になり，酒色の途に転落したりする。都会に出て商工業に従事するとしても，都会にも失業者があふれている。殊に中小商工業

は困っており，農村の次三男を吸収する余地は極めて少い。そこで田沢は，農家次三男の本格的進路は，移植民即ち，内地の未開墾地の移植民もよいが，満蒙や南米の新天地を開拓するための海外発展が必至だと云うのである。

田沢は勿論，海外発展の農業移民は，余ほど意思の強固な困苦欠乏に耐える信念と共に，金儲け目的の移民でなく，征服的優越感や土着民族を軽侮凌辱するような態度であってはならず，誰とでも手をつなぎ，土着民と共に新な文化を建設するような心懸けが必要だと云うのであるが，彼が農家次三男の本格的進路としてあげるのは朝鮮・満洲への移民である。そしてこの目的のために全力を尽しているのが，加藤完治の国民高等学校だと云う。田沢は加藤の国民高等学校が，長男教育と次三男教育とを明瞭に区別し，「次三男は朝鮮満洲の大陸移民を標的に，実際的訓練を行っている」[(42)]ことを特に重要視している。

デンマークにそのすぐれた精神的指導者グルンドウヰッヒが創立した国民高等学校についての紹介は明治時代よりわが国に紹介されつつあったが，[(43)]わが国最初の国民高等学校と云うべき山形県自治講習所（キリスト者藤井武計画）の所長を十年つとめた後，加藤完治は，昭和2年，茨城県友部に日本国民高等学校を創立した。その教育方針は，第一に，皇国精神の実践体験「わが皇国の真生命を直観し，その生命の弥栄に帰一すべき熱願を以て人生観の枢軸とする農民を作ろうとする」[(44)]のであり，筧博士の流れを汲んだ古神道主義が加藤の教育方針であった。第二は勤労主義であり，農場主義である。教室は極めて簡素なバラックで沢山であるが，農場には草一本はやしてはならず，開墾作業を尊んだ。第三は，師弟共働主義である。加藤は以上のような教育方針を日本農民道の確立，農村の根本的振興の方針だとした。ことに次三男教育においては，移植民の養成に全力を尽し，朝鮮，満洲の農業移民については全力を挙げてその成功に努めた。

こうした加藤完治の教育精神と同様の指導理念で農民教育にあたるものに，鳥取県の山陰国民高等学校，栃木県の上野原農学寮，長野県の瑞穂精

舎，及，長野県青年講習所，三重県の神風義塾，大阪府の三島郡農事講習所，香川県の県立農事講習所，大分県の県立玖珠農学校，長崎県の西海農学校，山形県の遊佐実業公民学校，岐阜県の那加高等国民学校，岩手県の県立六原青年道場，兵庫県の県立国民高等学校，台湾の台東農業補習学校，及，花蓮港農業補習学校等がある。大正期より昭和前期にかけて，全国に各種塾堂が勃興しはじめ，私塾制度の復活を思わせるような農民教育の新傾向が見られたことは事実であり，キリスト者たちの全国各地につくった農民福音学校[45]，あるいは，農村の中心人物養成を目ざす農士学校[46]も幾つか出来，その他，東方学園（宮城県），愛郷塾（水戸市），共存道場（栃木県），八紘学園（北海道札幌）等々がある。キリスト教系のものを除き，大部分は，皇国主義的精神の鍛錬と農業経営の修業とに中心的課題のあることは共通しているが，特に，日本植民学校（札幌），満蒙学校（東京神田），海外植民学校（東京世田ケ谷），等々，海外発展，移植民を目標とする教育機関も幾つか生れた。

田沢は加藤完治の国民高等学校の教育方針を深い共鳴をもって支持しており，右のような皇国主義及満蒙・朝鮮への移植民を中心的課題とする農民教育に関する疑惑ないし保留は何ら持っていない。ここでは，彼の理想主義的ヒューマニズムは勤労の尊重，皇国主義の光輝，個人的善意による他民族との同化（ないし，人民の苦しむ悲惨な満洲に「王道楽土」をつくろうとした満洲国への理想実現の夢）等の中に容易に解消し，帝国主義的侵略＝植民地化というような問題への批判的，ないしは，現状分析的観点はこの時点（昭和８年頃）においては全然見られないのである。農村の不況の解決（次三男問題の解決を含む）が自然的，かつ，必然的な道として朝鮮，満洲への進展に求められているのはおどろくばかりである。

4. あとがき

——田沢の挫折から学ぶこと——

大体，以上のような思想をその精神構造の骨骼とした田沢義鋪は，全国

の青年団の育成に精魂を傾けてつとめ，全国津々浦々の青年たちに父のようにしたわれる人格者であり，暖い教育者であった。しかし，彼の善意にもかかわらず，日本は彼が予期したような自由なる思想，判断，行動の豊かに育つ国とはならず，社会はますます暗い方向につき進んでゆく。

田沢が青年の政治教育のために大正13年に始めた政治教育雑誌『政教』の第37号（昭和２年１月１日）を彼は「新自由主義文献の特輯号」として出しているが，その巻頭に，この特輯について田沢は次のような文章を書いている。

「……自由思索と自由判断と自由行動との行われざること，わが国の社会の如きに於て，その弊害は最大なりと云わねばならぬ。而して，之れ実に，近代日本が，社会教育の基調として，各種啓蒙運動の前提として自由思想の涵養を閑却した結果に外ならぬ。……日露戦争後に於て，直に従来の中央集権的，劃一命令的の態度を改め，国民の自由思索，自由判断を基礎とする文化創造の大道に出でなければならなかった。然るに政府は固より，民間の識者も亦之に対する充分の努力を払うことなく，遂に統一病，劃一病の既に膏肓に入らんとする今日の状勢を馴致したのである。而かもその統一病，劃一病は，中央の政府が必要の限度を越えて統一し，劃一化せんとするの症状を現わすに止まらず，又実に地方人士がその自由創造の貴重なる機会を放棄し，自ら進んで統一され，劃一化されんとする状態にまで，その症状を進め来ったのである。」(47)

このように，日本国民が自ら研究し，実行しようとする気魄を失ってしまっていることを嘆き，人生最高の悦びは自由創造にあり，民族特有の文化も自由創造の土壌においてのみ発育することが出来るものだと慨嘆している。そして，彼は今日新自由主義を主張することの意義を述べ，従来の自由主義が個人本位の資本主義の欠陥の弁護者となる嫌があったが，「新自由主義は所謂社会化せられたる自由主義と云い得るであろう。」(48)と云い，協調会の従来の立場とは異った「社会化された自由主義」というものを追求してゆこうとする姿勢を見せている。（ただし，彼が社会主義にむ

かう形跡は見られないように思う)。

しかしながら，田沢たちの明治末期より大正時代を貫いての全国の農村青年たちに対する驚くべき動員力と浸透力とをもった国民教育運動にもかかわらず，真の自由主義的気魄が育たず，地方人士が自由創造の機会を放棄して政府の方針に自ら統一化され，劃一化されるというような現象が何故起ったかを田沢は自己批判的，分析的に見ぬいていたであろうか？

更に，晩年の田沢の時局への反応をみると，2•26事件後，国内の全体主義化は迫車をかけられ，芦溝橋事件を発端として日華事変がはじまり，軍部の東亜侵略の野望は露骨になって来た。昭和15年2月第75帝国議会において衆議院議員斎藤隆夫の行った質問演説は軍部に対する唯一の公然たる抗争であったが，衆議院は軍部の圧力に抗しかね，斎藤を反軍思想として除名する決議をなし，社会大衆党は斎藤除名に反対した自派代議士8名を除名処分にしてわづかに事なきを得た。この時田沢はこうした状態を憂い，日本の他の国家民族に対する態度に遺憾の点が少くないことを指摘し，日本民族の資質と性格の育成の大切さを説くと共に，政府（及び軍部）が衆議院の権能に干渉することが立憲政治の大原則に照して遺憾だとする大演説をやり，新聞は「敵も味方も粛然ときく憂国の雄弁」と報じたが，事実上は，こうした主張は政治に投映することなく，軍部の圧力は議会のみならず，政府をも無力化せしめてしまっていたのであった。このあと田沢は再び議政壇上には立たなかったと云われる。

大政翼賛会が成立し，各界の新体制運動が日を逐うて進行しはじめると，その指導的地位に田沢の親友や知人が多数就任した。田沢自身も翼賛会の中央協力会議の議員や各種委員会の委員に選ばれていたが，時局認識が多年の親友や同志のそれといちじるしく異るものがあり，公的な出所進退と私交との間に大きな矛盾を感じ，人知れぬ苦しみを味わい始めたのは，この頃だと下村湖人は云っている。(49) 太平洋戦争がはじまると間もなく，政府は民間の各種団体の統合をくわだてたが，財団法人協調会のみは断じてそれに応じなかった。田沢が常任理事の立場で峻拒したからだという。政府

の要人からの説得に対し，田沢は次のように答えている。

「私がこの戦争に反対なのは，君らのよく知っていられる通りで，今さら説明するまでもない。ただ，戦争に突入するのを防ぐ努力の足りなかったのを申訳のないことだと思っている。しかし，ひとたび大詔が渙発された以上，自分個人の主義を貫くに急であってはならぬと思う。だから積極的に戦争に協力はできないが，なるべく邪魔にならぬようにはしていたい。」(50)

と云い，戦争に託して，民間の自由を破ることに憤慨すると共に，この信条で生涯を貫ぬこうとする姿勢を明らかにするのであり，昭和17年，翼賛政治会が創立され，貴衆両院議員に入会申込の手続きが要請された時も田沢は断っている。そして，田沢は中央卸売市場淀橋分場の小売商連盟が経営する八百屋の子弟や小僧たちのための職業別青年学校の校長さんを自ら進んで無給で引き受けている。

このように晩年の田沢は日本の現実に大きな幻滅を覚え，静かな抵抗をしつづけている。しかし日本がこのように「幻滅」すべき状態にたちいたったことと田沢の道の国日本の完成を目ざして，ロマンティックな理想主義をもって皇国主義的愛国心と国民形成論を唱え，全国津々浦々の青年たちを育成して来た運動と無関係だったであろうか？　田沢の人のよさや誠実さや主観的善意における人間尊重主義，道義主義が彼の人格とその思想に内在するにもかかわらず，客観的には皇国観に基いた超国家主義を支え，応援助長する働きをする結果となったのは何によるのであろうか？　問題と思える点を幾つかあげてみたいと思う。

第一に，田沢は青年団に対する関心を山本滝之助によって触発されているのであるが，『田舎青年』によって，農村青年を論じた山本と田沢とを比較してみると，山本は彼自身一人の田舎青年であり，田舎青年の無神経，無気力，卑調猥謡，不品行，敗徳の現実を内側から深い慨嘆をもって知悉しており，その現実を底から見ぬきつつ，それを下から自分たちの力で改めてゆこうとするところに山本の「田舎青年」が追求する青年会のイメージがあった。それはまさしく，農村の若者たちを真に人間らしい青年たち

しめようとする下からの運動であった。ところが，田沢が農村青年に出逢ってゆくのは彼の自由主義的な思想的態度，ないし，善意にみちた主観的意図にもかかわらず，東大出身の秀才である内務官僚としての郡長としてであり，あくまでも上から「彼ら」を指導し，彼らを引きあげてゆくものであり，彼自身気がつかず，意図しないまでも，彼の背後には内務省，文部省，更に，陸軍省までが協力して推進しようとする地方改良運動，報徳会運動，国民道徳普及運動等の一環としての「青年団」育成方針があり，それが後光のように彼を背後から支える権力であった。

また，彼の安倍郡長であった時を除いて，彼は地方共同体に生活の場を青年たちと共にしたことはなく，天幕，あるいは，青年講習所における数日間の共同生活を共にしての指導であって，農村青年の生活の実体の中での時間をかけての人間のつくりかえ，地方自治体の形成というアプローチではなく，そこには，自らの限界があった。彼の指導を受けた農村青年にしても，田沢の個人的魅力に勿論ひきつけられ，感銘も受けたことは事実であるが，それと共に，当局の国民道徳運動の一環としての青年団運動を上からの統一化，劃一化の波として受身にうけとっていた面が多分にあったのではなかろうか？　それが現象としては青年団運動の驚くべき普及の仕方にもかかわらず，田沢の意図した創意にみちた自由主義的気魄を農村青年のふところに育成することにはならなかったのではなかろうか？

第二に，彼の思想の構造を全体としてみる時，「道の国日本」，「道義国家」という理念が基底をなしており，それの形成が最後の目的であって，「個人」も「人類」も重要視されているにもかかわらず，従属的位置を占めているように思える。「道の国日本」が中軸をなす原理であって，それの完成こそ人間を真に人間であらしめる道であり，また，人類的であることなのであって，「道の国日本」としての理想主義的，ローマン主義的国家の理念を超える原理は見出せない。帝国主義的国家権力と国家権力とが相剋する生存競争の世界の現実にあって，いわゆる明治藩閥政府の天皇制的国家主義者ならずとも，北一輝などは国家を社会的単位とする生存競争を

なす生命ある社会的実体としてとらえており,(『国体論及び純正社会主義』明治39年), 浮田和民のような自由主義者も,『帝国主義と教育』(昭和34年)において,侵略的膨脹としての帝国主義(政治的,軍事的)と区別して,自然的膨脹としての帝国主義(人民的,経済的)は正当なるものであるとし,教育の方針も遠大にして個人的にも,社会的にも,また,国家的にも世界的生存競争に適合する進取的積極的人民を養成すべきだと主張している。(51) こうした現状を背景として,田沢の「道の国日本」という国家観を考える時,「道義」を「生存競争」に対置していることに一つの大きな質的前進があると見られなくはない。しかし,他面,北や浮田の方が集団的生命体であり,権力組織でもある国家の本質をより現実主義的に把握しているのであって,田沢の「道義の国日本」という観念は,ローマン主義的理想主義としては美しいが,その国家が,ドイツの場合と同様,そうしたローマン主義をかかげる軍国主義的ファシストに主権を握られて,自国民族や自国の国体の栄光化をもって,全体主義,侵略主義に傾斜してゆく時,それを制止しうる歯止めは何ら用意されていないのである。むしろ,逆に,国体明徴,八紘一宇,大東亜共栄圏などの思想に易々と利用されるロマンティックな国家観なのである。

また,当時の日本人に国家の独立,国権の確保ということから切り離して把握される「個人」の概念とは,現実的には,世界の中に浮動する塵のような,根なし草的存在でしかありえないところの人間の在り方を想定する空論か,さもなければ,国家を正面から否定するアナーキズムとしてしか受けとれないものであったかもしれない。しかしながら,それにもかかわらず,一方,日本民族の血族主義を底辺とし,その長である天皇の万世一系性に精神的生命を見る国家観から独立に,それを超えて,あるいは,それとの対立をも辞せずに「個人」が独立的人格として把握される人間観,及び,個人を国家や社会構成の原単位とする観点を欠き,他方,そうした国家を超え,場合によっては,その国家権力の在り方に批判的規制を加えることも,国家以上の普遍的価値への献身を国家に要請することも出来る

ところの普遍的超越的概念としての人類意識も本来の意味のそれとしては把握されていない時，そのような田沢の思想をヒューマニズムの一つのタイプと見ることは困難である。即ち，彼の「道の国日本」の思想，修養論等を貫く道義性，ないし，倫理性の尊重，「大いなるもの」，「永遠なるもの」といった発想をささえる人間の精神的把握にもかかわらず，そして，また，それが，日本の精神的伝統から内発的に導き出された「ヒューマニズム」への積極的志向を生々と持っており，一つの可能性としての発芽とも見られるにもかかわらず，人間論，あるいは，人間形成論として思想的みのりを持ち来らさなかった内在的要因が，「国家」を主軸とする思想の構造そのものに内在していたのではなかろうか？　「国家」とは日本人にとって，観念的にではなく，歴史的，現実的に人間解放——精神的近代化を追求する時，一つの「業（ごう）」のようにからみついて離れない「負い目」的課題なのかもしれないと考えさせられるのである。そして，それから単に逃れて外に向うことに日本の思想的土壌における生産的な答えがあるのではなくて，それを負いぬいて，つきぬけてゆく道を見出すことに，本当の生産的な方向があるのかもしれない。

第三に，彼の天皇観は，さきにも触れたように，血族的共同体の頂点であると共に，精神主義的な価値体系の頂点であり，またそれを，田沢は，思想的，政治的に超越的，中立的実体たらしめようとひたすら努めている。しかしながら，たとえば，福沢諭吉が神話的史観などはいささかも認めないにもかかわらず，帝室をして，政党的対立を緩和させるための超越的契機として利用しようとし，或は中江兆民が，天皇を「神様のように尊いお方」と，藩閥政府より更に高いところにおし上げることによって，かくれみのになっている天皇を藩閥政府よりひき離し，そのことによって，相対的な政治の次元で藩閥政府を自由に批判，攻撃する条件をつくり出そうとしたらしいこと等に見られる政治的認識と対照するとき，田沢の把握する天皇観はあくまでも精神主義的把握であって，非常にリベラルな，そして，ヒューマニスティックな香りを持つ思想であるにもかかわらず，合理主義

的思考の対象として，その分析と評価とを経た思想ではないのである。従って，機関説的天皇ではあくまでもないのであって，精神的（道徳的，宗教的）意味をもつパーソンである。こうした天皇観の故に，大正デモクラシーの美濃部達吉や吉野作造らのデモクラシー思想と近似しているようでありながら，彼らの機関説や民本主義が藩閥政府を敵として，（山川均ら社会主義者たちからは主権論をあいまいにしたえせ民主主義と批判されながらも），民権の実質的獲得のためにたたかうのと対照して，田沢の天皇観は神道家や超国家主義者たちの天皇観，国体明徴思想，「国体の本義」や「臣民の道」に見られる天皇観との区別が不明瞭であり，その陣営の援軍としてむしろ歓迎され，利用もされ，彼自身気がついた時には，日本は既に病，膏盲に入らんとする状態にたちいたっており，手の下しようがなかったのではなかろうか？

しかしながら，彼の晩年の大勢へのきびしい，孤独な抵抗の中にこそ，上にあげたような諸点にもかかわらず，彼のもう一つの側面，それこそ日本の精神的伝統から人格主義的主体の確立と「新自由主義」（社会化された自由主義と彼の呼ぶもの）とを骨として人類主義へとつながってゆく思想の可能性が見出せるのではないかと思う。そうした可能性としての萌芽——これは田沢の中にあったと共に，日本の幅広い農山村から都会にいたる人々のふところにある萌芽でもある——をこそ大切にすくいあげ，田沢において見られるような官僚主義，国家主義，天皇観等の犠牲に供することなしに，日本の明日の建設への真のエネルギーにしてゆく道をさがし出すことこそ，今日の私共の取組まねばならない思想的課題なのではないかと考えさせられるのである。

（本学教授）

註

1. 『田沢義鋪』田沢義鋪記念会，昭和29年11月24日刊。28—29頁。
2. 「青年団体に関する通牒」は同じく大正4年9月15日，内務次官　久保田政周，文部次官　福原鐐二郎の名で各地方長官宛に出されている。

   更に，「青年団体の設置に関する標準」として，四項目(1. 青年団体の組織 2. 青年団体の設置区域　3. 青年団体の指導者・援助者　4. 青年団体の維持)

を明記しているが，第3項の「青年団体の指導者援助者」には，「小学校長，又は市町村長，其の他名望ある者のうち最も適当と認めたものをして之に当らしめ，市町村吏員，学校職員，警察官，在郷軍人，神仏，僧侶，その他篤志者中適当と認める者をして協力指導の任に当らしむこと」としている。

3. 「地方改良の方針」一木内務次官談，明治42年7月27日『毎日新聞』。

4. 大島美津子「明治末期における地方行政の展開——地方改良運動——」（『東洋文化研究所紀要』第19冊所収）もこの問題を取扱っている。

5. 報徳会の機関雑誌ともいうべき『斯民』が発刊されたのは明治39年4月23日のことである。「開刊の辞」（第1号）には，「一国の文化に最も尚ぶべきものは，其国民道義の念に厚く，又勤労の風に富み，崇高秀美の生を全うするに在るのみ。国家の富力熱望亦実に源を茲に発せざるはなし。凡そ国家興隆の因を為すべきもの，之を大別して二と為す。一は国民の道義的活力にして，他は国民の経済的活力是なり……」とあり，「二宮尊徳翁の主義及人格」と題して留岡幸助（元監獄の教誡師で，当時，不良少年のための家庭学校長——内務省に関係あり）が書いていたり，柳田国男（法制局参事官）が「報徳社と信用組合——社会改良事業家としての二宮翁の位置——」（第2号）を書いていたり，主として二宮尊徳の人格と業績をめぐる記事が多い。（創刊号より内務書記官，後の神社局長の井上友一が「自治と公徳」，「民を導く道」等について書いていることは事実であるが）。

内務省の地方自治政策推進の担い手の性格がやや明らかになるのは第8号あたりからである。この号から，赤色のとびらに別刷りにて「『斯民』の本領と希望」が次のように明記されるようになる。

(1) 「斯民」は精神訓育の作興を図ると同時に之に関する資料を供給するものなり。

(2) 「斯民」は地方自治，教育，及，風化に関する事業を調査し以て之を報道するものなり。

(3) 「斯民」は経済の発展，及，之が利源の開拓に参考となるべき事項を調査報道するものなり。

(4) 「斯民」は青年団体，報徳社，及，奨善団体の為めに参考となるべき資料を供給するものなり……。

そして，この時期より内務省地方局長の床次竹二郎が殆んど毎号地方自治の問題を中心に論説を書いており，更に内務次官一木喜徳郎，内務大臣平田東助らの論説も多く見られるようになる。明治42年には，内務省において開催された地方改良事業参考資料展覧会の光景が口絵にのせられており（第7号），「自治民政」の欄には報徳精神に基いた模範部落，模範信用組合，模範農夫な

どの紹介（全国各府県より材料を得て）をはじめている。「青年団」の欄が出来るのもこの年（第9号）からである。

明治44年からは，『斯民』と並んで『斯民家庭』という雑誌も共に「民風作興に資するため」に発行されはじめるが，同年第1号巻頭に「報徳会は国家気運の進歩，地方の開発改良を計らんが為め，誠実勤労の民風，協同推譲の精神を作興し，地方自治の新興，諸般民政の発展，道徳経済の調和，教育産業の連絡を図り，以て一般国民を通じて其実力品性の向上を期せんとす。…」と本会の本領，希望をうたい，更に，具体的にかかげた八項目の最初に，「教育勅語を始め，聖旨を奉戴し，精神訓育を奨めて，国民風気の作興を図るをあげている。このようにして，明治末年より報徳会，及び，その機関誌『斯民』は大正期にかけて明らかに内務省の地方改良運動の推進力となって行ったのであった。

6. 田沢義鋪『青年団の使命』（昭和5年）日本青年館刊。54—55頁。
7. 同上，4—5頁。
8. 熊谷辰治郎『大日本青年団史』昭和17年。
9. 山本滝之助『田舎青年』1頁。
10. 同上　52頁。

山本滝之助は，更に，明治32年12月には陸羯南主筆の新聞『日本』に同紙愛読青年をもって一つの全国的青年会を作ろうと提唱する一文を投書したりもしている。（熊谷『大日本青年団史』81頁参照）

11. さきにも触れたように，徳川時代は「若者」という用語が用いられていたのであって，「青年」という名称は明治13年にキリスト教青年会の雑誌『六合雑誌』（小崎弘道，植村正久，田村直臣ら）が創刊された頃，小崎弘道が young man を「青年」と訳したのがはじまりであり，それ以来明治時代を通して，『青年会』という用語が一般にも用いられるようになった。「青年団」というようになったのは大正4年の訓令以後のことである。

なお，明治38年8月，第3回全国連合教育会の折，山本滝之助は青年団育成の必要を説いて次のような演説をした。若連中，若い衆組が全国到る処の町村に存在し，男子15才～30才のものが大体之に加わるのが現状であるが，これらの団体が飲酒，喫煙，その他の悪習をもち，小学教育の効果を妨害しつつあることは事実だが，これは決して青年団体そのものの罪に帰すべきでないと云い，若連中の起った当初の目的は相互に親睦し，保護し，制裁し，一身一家より郷党部落の安きを保つための一種の自治機関たらしめようとしたものであった。これは町村自治との関係は非常に重要であるし，排斥するよりは，青年の社交機関とし，独立自営の精神を涵養し，社会的道義心を陶冶するよう教育者が協力して，正しく助成する必要があると。

このことが刺戟となって，同年10月，文部省に設置された「通俗教育（今日

の社会教育）に関する調査委員会」が，時の久保田文相に，『地方青年団(若連中，若い衆，青年会等悉くを含む）の調査をなすこと」地方に於ける青年団体を改良し，善良なる発達を遂げしむるは通俗教育上極めて有効であるから，指導改良の方法を講ずるよう建議をなしたのであった。このようにして，政府当局が青年会運動を通俗教育，補習教育の方便として関心をもちはじめるようになり，大正4年には，はじめにもふれたように青年団に関する訓令が発せられるようになり，内務省の地方改良運動やそれと結び合わされて行った報徳思想（さきにも詳述したように二宮尊徳の報徳教に基き，道徳と経済の調和を計り，勤労，勤倹，社会奉仕等を説いた）などによる積極的な指導が全国各地の青年団の上に及ぼされた。そして勤労の精神を養い，共同販売や共同貯蓄，地方改良，村勢の調査，納税成績の改善，各種共同事業を起すなど，青年団は一見，進歩発展した。しかし，田沢はこの頃の青年団は，青年自身の自発性に基く要素が閑却され，青年らしいというより，むしろ分別くさくなりすぎた観があったと評価している。

12. 田沢義鋪『青年団の使命』日本青年館刊　昭和5年。
13. 前掲書　181—182頁。
14. 前掲書　76頁，172—173頁。
15. 蓮沼門三自伝『永遠の遍歴』修養団刊 199頁。
16. 下村湖人『田沢義鋪』94頁。
17. 同上　98頁。
18. 田沢義鋪『青年如何に生くべきか』昭和12年日本青年館刊。156頁。
19. 田沢義鋪『青年修養論』人生篇。日本青年館刊，昭和11年6月。これは昭和19年以来雑誌『青年』に連載された文章を集めたものである。
20. 『青年如何に生くべきか』190—191頁。
21. 『青年修養論』107頁以下。
22. 同上　134—135頁。
23. 同上　179—181頁。
24. 同上　189頁。
25. 同上　191頁。
26. 掛川トミ子「野間清治と講談社文化」『思想の科学』（中央公論社刊）第10号特集「大衆の文化を創るもの」参照。
27. 「白鳥芦花に入る」の出典について，田沢義鋪，下村湖人両氏の愛弟子であり，思想の継承者である安積得也氏および，加藤善徳氏らより御指示いただいたところによると，新風土会より出版された永杉喜輔編集『一教育者の面影——下村湖人追想——』（昭和31年刊）に杉本良氏（元台湾総督府文教局長）の「火吹竹」と題する一文が収録されている。これによると，杉本氏が手紙で

「白鳥芦花に入る」の出典をたづねたことに対して，湖人は次のような返事を書いてよこしたとのことである。「『白鳥入芦花』の出所について御下問ですが，実は臨済録に『白馬入芦花』とあります。馬では何だか気持がぴったりしなかったので，そっと鳥にすりかえたわけです。学問の本だとこんなことは許されますまいが，小説だからかまわないと云う気でつい乱暴をやった訳です。で，小生の造語ということに御諒解を願って……°」（同書27頁）。

28. 田沢義鋪『道の国日本の完成』（日本青年会館刊，昭和3年，昭和9年，24版）55頁。

29. 同上 56頁。

30. 同上 39—40頁。

31. 同上 87—88頁。

32. 同上 93—94頁。

33. 下村湖人『田沢義鋪』 161頁。

34. 田沢義鋪『道の国日本の完成』 2—4頁。

35. 田沢義鋪『農村更正と青年教育』農村更生叢書11，昭和8年，日本評論社，82頁。

36. 田沢義鋪『私を感激せしめた人々』昭和6—8年。日本青年館，新政社，15版を重ねた。

37. 例えば，大正9年，松江市に於ける「島根県自治協会，仏教奉仕会，青年団講習録」「自治生活の改善」。これは上記安積得也氏より拝借させていただいた。

38. 田沢『農村更正と青年教育』 3頁。

39. 末松太平『私の昭和史』（みすず書房）は，5・15事件後，昭和7年8月頃渡満した兵隊には貧困な農家出のものが多かったが，青森県農村の冷害による凶作などもあり，出征兵士の後顧の憂は深く，彼らに届いた慰問袋はもう一度海を渡って凶作地へ送られたと書いている。同書83頁。

40. 大正11年の労働年鑑によると協調会主催の労働講習会は世田谷の国士館に於て官業工場の労務者に限って開き，海軍工廠—30名，鉄道省—20名，砲兵工廠—20名の合計70名を選抜し，プログラムとしては，起床，静坐（朝・昼・晩）遥拝，朗読，体操を日課とし，講義としては次のような内容と講師であった。

思想問題一斑	深作　安文
生産と分配	気賀　勘重
人生と国家	田沢　義鋪
社会政策大意	藤井　　悌
修養の根柢	後藤　静香
宗教と実生活	宮沢　説成

41. 「島根県講習録」（大正9年8月）「補習教育に関する希望」（これも安積氏

より拝借）もこうした主張を含んでいる。

42. 田沢『農村更正と青年教育』93頁。

43. 田沢によれば，デンマークの農村教育をはじめてわが国に紹介したのは佐藤寛次(明治37年)，ホルマン著『国民高等学校と農民文明』を訳したのが那須皓(明治43年)，九大教授小出満二もこれに関し多数著書，論文を書き，平林広人も自らデンマークの国民高等学校の教育を体験し，その紹介移植に努めた。わが国に初めて国民高等学校が実現したのは大正4年であり，自治講習所の名のもとに山形県立として創設せられたが，計画者は当時少壮事務官（学務課長）であった無教会の藤井武であった。（知事は小田切盤太郎)。加藤完次はこの山形自治講習所長として10年つとめた後，ここを後進にゆづり，茨城県友部に日本国民高等学校を創立したのであった。加藤はわが国の国民高等学校経営の数年の経験をもってデンマークにゆき，むしろ，彼の短所を批判して，わが国の国民高等学校運動が断じてデンマークのそれの模倣であってはならぬと主張していた。(前掲書　35頁)。

44. 前掲書　36頁。

45. キリスト教系農民福音学校は次の諸学校である。群馬県，下福田，駿州，大貫，利府，宮崎県，加世田，三国，松南，藤崎，八戸，小出，築館各農民福音学校，綾部，旭東各国民高等学校，渋川民衆高等学校。

46. 農士学校は次の諸学校である。

日本農士学校　埼玉県菅谷荘
福岡県農士学校　早良郡脇山村
大阪農士學　大阪府泉北郡陶器村
陽和郷農士道場　岩手県岩手郡雫石村西山村

その正徳科目は，日本精神及国体の究明，東洋先哲の学の参究，農士道の体究，農村開拓の偉人研究，他国民精神究明の為めの外国偉人研究，時事解説並に批判，習字，武道及士気を涵養振作すべき音楽。

利用科目は，農業一斑，農家経営，農村経営，政治経済通論，自然科学概論，実習。

47. 『新政』第37号，大正16年1月1日とプリントされているが，大正天皇崩去前に印刷したものであろう。正確には，昭和2年1月1日の意。

48. 同上。

49. 下村湖人『田沢義鋪』 232頁。

50. 同上　233頁。

51. 浮田和民『帝国主義と教育』(明治34年7月）及び『国民教育論』(明治36年3月）両者とも民友社刊。

（資料に関して加藤善徳氏，熊谷辰次郎氏，安積得也氏，日本青年館調査室長成田久四郎氏らにいろいろ御好意にみちた御配慮をいただいたことを感謝する。）

The Educational Thought of Tazawa Yoshiharu

—The Nature and Role of the Idealistic and Nationalistic Movement of Seinendan (the National Youth Organization) during Taisho and Pre-war Showa Period—

Kiyoko Takeda Cho

(English Résumé)

Tazawa Yoshiharu (1885-1944) was an influential educator who founded and promoted the Dai Nihon Seinendan (the National Youth Organization). This organization was most active among the vast number of youth in farm or rural areas all over Japan during the period 1910-1940. Tazawa began his career as a district headman having been appointed by the Department of Home Affairs in 1910 soon after being graduated from Tokyo Imperial University. Around this time a national policy to re-organize rural communities through the joint efforts of the Ministries of Home Affairs, Education and Army was being pursued. The emphasis was on nationalistic moral education in order to overcome the moral vacuum after the Japan-Russo War, and to strengthen the physical and spiritual potentiality of the nation. Thus the government was anxious to re-organize Seinendan (youth organizations) in rural communities as the core for this movement.

Tazawa Yoshiharu, although a bureaucrat in the Dept. of Home Affairs, was a sincere and influential educator and youth leader. He emphasized the importance of personality development in each individual and his initiative and creative role in the youth movement. He was definitely against militarism, totalitarianism and despotism. Thus he was liberal and democratic in his life philosophy. Under his leadership Seinendan grew rapidly throughout Japan and was organized on a national basis. He had an ideal to re-build the character of Japanese people as moral and righteous people.

At the same time he was a romantic idealist who believed in the myth of the Imperial Household and regarded the Emperor as the spiritual basis of ethics and of the peace-loving nature of Japanese people. Meiji Shrine, as the spiritual symbol of nation, was built by the voluntary manual labor of fifteen thousand young people through Tazawa's efforts. Through these kind of activities Emperor worship and romantic nationalism were propagated among rural youth throughout the nation. This energy was cleverly mobilized later toward ultra-nationalism by reactionary nationalists.

The purpose of this essay is to analyze the nature and role of Tazawa's nationalistic educational thought and activities in order to determine the positive and negative elements which were embodied in the nationalism of the pre-war Japan, and to search for the indigenous roots of humanism out of the Japanese spiritual soil.